
ネギまに生まれし神祖の吸血鬼

ロリコンによるロリコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまに生まれし神祖の吸血鬼

【著者名】

ZZ3300

ロリコンヒメロリコン

【あらすじ】

死にかけた少年がよくわからない存在に意識を拉致られ一つだけ願いを叶えてもらいネギまの世界に。
少年はなにをなしてどう生きるのか。

プロローグ（前書き）

読んでくれるとうれしいです。
ぐだぐだですがスルーでお願いします（笑）。

プロローグ

「うむ……？」

「ようじや。私の部屋に。」

あなたの部屋？

「ああ、私の部屋だ。」

あなたは誰？

「うん？私が？私はお前たちでいうよくわからない存在だな。」

よくわからない存在？

「ああ、私自身もわからない。」

そうなんだ。

それでなぜ僕はあなたの部屋に？

「私がお前を呼んだからだな。」

何のために？

「うん……暇つぶし。」

暇つぶし？

「やつ、殴つぶしだ。」

それで、どうするの？

「やうだな・・・お前はここ来る前のこと覚えてるか？」

「ここ来る前・・・

僕は・・・

どうしたんだつけ？

「やつばつれてるか・・・」

忘れてる？

「仕方ない・・・ちよつといつに来て。」

何するんですか？

「うん？ああ、お前の記憶を引きずり出すから少し痛いぞ。」

へつ？

うあああああ

くつ痛いイタイイタイ

はあはあつ・・・

「すまんな。だが思い出しちゃう？」

僕は・・・死んだんだね。

「いや違つ。正確にはまだ身体は生きている。」

ならなんで僕はここにいるの?.

「それは最初に言ったが?」

僕を返してくれたりは?」

「ないな。だいたい戻つたとしても一度と身体が動くことはないぞ。」

「

なぜ?」

「体中の神経が完全に壊れているからな。」

そつか・・・
ならこれから僕はどうしたらいいの?」

「やうだな・・・お前には生き返つてもらおうかな。」

そんな事出来るのー?」

「んつ?私にできなことは何でもいいだぞ。」

・・・それは誰でもしたくないことなんじゃ・・・

「いやいや、したくても出来ないんだ。」

なんでしたいの?」

「それは飽きたからだ。退屈はすべてを殺す。」

・・・・・

「それはいいとしてお前の希望の世界はあるか？」

・・・魔法がある世界がいい。

「すぐに死ぬぞ。」

それでも行つてみたい。

「・・・なら」に呼んだのも私だし好きな力を一つだけやひ。

僕が思う神祖の吸血鬼にしてほしい。

「神祖？お前神になりたいのか？」

いや違う僕は真祖を超える真祖になりたいんだ。

「ふーん、まあいいだろう。」

それで・・・いいのか。

「うん？構わないよ。ただ容姿は決めさせてもらひたがどな。」

そこまでは言わないよ

「私は基本見守るだけだからこれ以上は関わらないから。」

行く世界の名前だけ教えて欲しいんだけど。

「それぐらになら構わないよ。えっとたしかねぎまだつたかな。」

それって漫画じゃないんですか？

「うーん基本小説とか漫画とかは実在するよ。ただ並行世界だけど。」

なんですか・・・それ

「気にしないほつがいいんじゃないかな？」

そうですね。

「かくわらわら君を転生させよつか。」

わかりました。

「それじゃあ・・・ほつと」

身体が・・・透けていく。

「じゅったのましてくれよ。」

ああ、ありがとうな

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

主人公設定です。（前書き）

チートなのか？

微妙です。

主人公設定です。

（主人公設定）

名前：新堂 真央

性別：男

年齢：十八

二つ名：「真祖を超える神祖」「舞姫」「なにあのネギは?」「俺
はあのひとの攻撃で目覚めたんだ」

「殺さぬ慈愛」「幼女神降臨」

発動キー：ウ・クト・ウ・シユルト

容姿初期：百三十㌢ぐらいの身長で髪は腰にかかるぐらい長く、
その髪は綺麗な蒼色で目も同じく蒼色

でとても愛らしい顔をしている。道を歩けば十人が十人
振り向くほど。

性格：好奇心が強い、死を嫌い不殺を心に誓う、誰にでも基本優し
い、温厚でほんわかしている。

しかし、真面目な時は真剣にそれを行う

ステータス

筋力：S

耐久力：S

知力：S

敏捷：EX

幸運：B

魔力：EX

気：EX

宝具：EX

固有スキル

男の娘EX

なぜか決めてもらつた容姿が男の娘
しかもかなり可愛い

年齢変化：A

身体年齢を5歳から25まで変えることができる

性転換：A

なぜか変えることができる

声帯模写：A

どんな声でも真似できる

蝙蝠化・霧化：A

吸血鬼と同じくすることができる

眷属化：S

意識して眷属にしようとして噛むと真祖の吸血鬼にできる

NEW!! 魂の契約

豊と契約したことにより半分神となつた。
神力が身に着いた。

宝具：EX

その身体が宝具となつてゐる
あとネギを無限に生み出せる

状況確認は大事です。（前書き）

今はペースが速いですけど少ししたら落ちます。

なるべくはやく投稿したいと思います。

楽しんでくれるといつれしいです。

状況確認は大事です。

目が覚めるとそこは森の中だった。

なぜこんなところに出たのかはわからないが・・・
よくわからない存在のせいだろ？

ここがネギまの世界のどこにあたるのかはまだわからないが、
たぶん魔法世界の方ではないだろうか。
だってこんなに大きな木はないと思うから。
しかもたくさん。

とりあえず自分の格好を確認しなければならないよな。
どこかに鏡的なものはないかな。

探している間に服の確認だ。

青い服に身を包まれていて靴はブーツ。
その上にローブを着ていた。

うん、よくわからない存在は趣味が結構いいな。
自分の姿がわからないから似合っているかはわからないけどね。

そういうしている内に池というか湖みたいなところに出た。

水面を覗き込んでみると・・・
そこには愛らしい美少女が居た。
一目惚れしてしまつぐらに愛らしい美少女が・・・
つて、これつ僕！？

僕が驚くと同時に水面に映る美少女？も驚く。

ほっぺを引っ張つてみる。

美少女？も引っ張る。

これは・・・・・。

うん、認めよう。

この美少女は僕なんだね。
でも望みはある！

そう、息子の存在さえあればいいんだ！

確認したが・・・

どうやら大丈夫なようだ。

息子は僕に元気な姿を見せてくれた。

よかつた・・・ほんとによかつた。

姿は勝手に決めてくれと言つたから仕方ないとして・・・
身体能力はどうなつているんだろう？

そう思つて近くにあつた大い石を掴んでみて力を入れ持ち上げよう
とした。

すると自分の体ぐらいある石が簡単に持ち上がつた。
感覚的には小さな石を持ち上げたくらい。
はんぱねえ・・・。

よくわからない存在は願いを叶えてくれたようであれしい。
そのあとも少しあしゃいでしまつたが。

仕方ないよね。

そういうえば僕って蝙蝠とか霧になれるのかな?
やっぱり吸血鬼と言えばこれだよね。

僕の体の一部が蝙蝠になる。

そう考えた瞬間、体の一部が蝙蝠になった。
どうやら想像するだけでいいらしい。

身体能力とかはもういいとして・・・魔力や気つてちゃんとあるのかな?

よく本とかには自分の中にある力の本流とかいうような説明がしてあるしそれでできるかな?
ものは試しだやってみるか。

目を閉じて、心を落ち着かせて、自然を感じ、自分の中にある何かを感じる・・・。

すると、体の奥底に一つの何かを感じた。

これが・・・魔力と気かな?

意外とわかりやすいな。

濃厚な自然を感じる方が魔力で、元気の塊のような感じがするのが気かな。

そんな気がする。

二つがわかつたのはいいんだが・・・

使い方がわからないから宝の持ち腐れだな。

そうだなどりあえず体に魔力を纏わせてみるといいかな。

手から足に足から手にそれを繰り返すとなんか手に集めてみたくなつた。

あれだ、灼熱ゴッドワインガー的なことがしたいんだ。

考えればそく行動。

手に魔力を集めてみる。

すると手から魔力が放出され何かを形作つた。
なんだろ？・・・？

それは・・・・・

それは・・・・・ネギだつた・・・・。

Why? なぜ?

ネギつてなんなの！？

確かにここはネギまの世界だけじゃ。

期待としておいてネギつて・・・・。

ひどくないか・・・・よくわからぬ存在・・・・。

そのまま落ち込んだまま回復するのに時間がかかつた。

状況確認は大事です。（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

ネギの使い方と魔法（前書き）

眠いけど書きました。

ネギの使い方と魔法

あのネギ事件から数時間後・・・

だいぶ精神的ショックから回復した。
あれはギヤグに使える。

ほかに使い道はあるのだろうか？

あのネギが何に使えるか調べてみることにしよう。

叩いてみる

異常に硬かつた、石が壊せた。

嗅いでみる

鼻がツーンとして涙が少し出た

投げてみる

周りの木に当たって砕けた・・・ネギが。

周りにネギの匂いが広がった。

涙が止まらない。

食べてみる

普通にネギの辛い味がした。
軽く涙になつた。

焼いてみる

香ばしい匂いがした。

美味しくいただきました。

どうやらこのネギは完全に実体化してゐみたいだ。

魔力が続く限り望めば望むほど出てくる。

それに僕の体に触れてる時は岩をも碎く硬さになる。

しかし、ひとたび体を離れると豆腐の「」とく柔らかくなる。

焼いた場合は不思議と普通のネギと同じくらいの硬さになった。

というか調理したら普通のネギになつた。

これは買い物に行かなくて楽だ。

まあ、いつまでもネギを調べているわけにもいかないな。
とりあえず町を探すかな。

僕・・・吸血鬼だとばれないよね?

ちょっと不安だな。

とりあえず第一目標は町を見つけるでいいかな。

どっちに行こうかな?

うーん、よし右にまつすぐ行こう。

何かあるはずだ。

そう思つていたのが四日前。

「 まだ街は見えない。 」

さすがに疲れてきた。

精神的にだけど。

ああ早くどこでもいいから着かないかな。

それからさりに四日後。

やつと街が見えてきた。

行き交う人に聞くとあの街はアリアドネーらしい。
魔法を学ぶにはいいかもしない。

入国したよ。

というわけで聞いてみることにした。

「 ねえ？ そこのお姉さん魔法を学びたいんだけど・・・
どうしたらいいかな？ 」

こいつは聞いてみるのが一番や。

「 あら、 魔法を学びたいの？ 」

「 それならアリアドネーにある大図書館で私が教えてあげるわ。 」

「 初めて会ったのにそんなことしてもらつてもいいんですか？ 」

「んっ？ 見たところ魔力は十分にあるみたいだし……なにより可愛いか。」

「……お姉さん、僕は男ですよ。」

「えっ……なんて」と……「んなに可愛この……男ですか……」

「それはいいとして、僕魔法を学べるんですか？」

「うう、うう。構わないわ。」

「やつたー魔法を学べるんだー。」

「（なに）の生き物……超かわいい……（ええ、今すぐでも構わないわ。）

「本當？ なら今すぐ行くー！」

「えつ？ なら行きましょうか。」

それから……一週間後

「まさか……一種間で魔法のほとんどをマスターするなんて……」

「うさ、楽しかったよ。」

「うう・・・それはよかったです（私は四年もかかったのに・・・）。

「

「今までありがとうございました、僕また旅に出るよ。」

「ええ、そうしたらいいわ。」

「お姉さんありがとうございました。」

「私はメイラよ。」

「わかった、メイラさんありがとうございました。」

「元気でね。」

「メイラさんもね。」

「そうして僕は魔法を獲得した。」

ネギの使い方と魔法（後書き）

どうでしたか？

魔法球作成（前書き）

寝不足です。

魔法球の作成は作者の妄想で出来ています。

気にせず読んでください。

魔法球作成

魔法を習つて百年がたつた。

その間はずつと旅をしていた。

村を救つたり、孤児を拾つて育てたり、武術を磨つたり、幼女の吸血鬼に襲われて逃げたり、時々はあはあしながら迫つてくる中年男性を殴り飛ばしたり、国を作つたり、竜と遊んだり、上位精霊とかいう女性型をした者たちとお茶会をしたり、時々セクハラしてくる青年を殴つたり、魔獣に餌付けをしたり、本を書いたりしていた。

思い返すと百年でいろいろな体験をしたなあ・・・。

どれも昨日のように思う。

今は一つの場所に留まり生活をしているけどね・・・。
魔法世界のどこかの森に住んでいる。

ここは人外の者しか来れないような場所でとても静かだ。
と言つても、よく人語を解する魔獣とか竜とか精霊とかが訪れる
で淋しくはない。

ここに来てからすでに一年がたつ。

意外と住みやすくて時間をついつい忘れてします。

と/orか・・・ここつてネギまの世界だつたんだよな・・・。

普通に暮らしてたから忘れてたけど。

今がどの時期なのかがわからない。

時々精霊さんとのお茶会で風の精霊さんが人間たちが何かを始めて
いると言つていたが・・・。

もしかして大きな戦争でも起るかな？

そういうえば原作でもなんかあつたような・・・。

あんま読んでなかつたしな・・・。

まつ、もう少ししたらここを出るかな。

そうして回想とかしてから一週間がたつた。

僕がここを出ると魔獸やら竜やら精霊たちに言つと僕に着いて來た
いそゞだ。

だけどどうやつても連れて行く事は出来ないんだけど・・・。

そのことをみんなに話すと精霊さんが人間たちが作る魔法球とか言
う物を作つてはと提案してきた。

だけど僕は作り方を知らないと伝えると、精霊たちが知つてゐるそつ
なので教えてもらいながら作る事になった。

材料はここに住んでた魔獸と竜から提供してもらつた。

そして作る事になった。

作り方は案外簡単だつた。

火で溶かした材料をガラス球みたにして作った台に固定する。

そこに僕が魔力を満ちるまで注ぎ込む。

その時に精霊さんたちが歌を歌いながら綺麗な光を放つ魔方陣を魔

法球の原型に刻み込んでいった。

その周りで竜が楽しそうに踊り、魔獸が夢心地に寝ていた。

そして、魔力が球に満ちた。

すると魔法球が完成した。

大きさは僕より大きい。

つまり、直径百五十ぐらいはある。

だが中身は空っぽだ。

精靈さんの話によれば僕の魔力の質と全精靈さんの上級だけが集まつて手伝った事と竜たちが踊つていたことである意味超巨大な増幅効果が表れたらしい。

本当ならばできた魔法球の半分の大きさの予定だつたらしい。

これならばこの森すべてを内包できるとのこと。

せっかくなのでみんなに協力してもらい森をすべて魔法球に入れた。持ち運びは精靈さんが小さくしてくれたので問題なかつた。

魔法球を作つてから僕はまた旅をし始めた。

最初はヘラス帝国にでも行こうかな？

魔法球作成（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

戦場にて主人公は敵を刺す（前書き）

オブラーートに包んだ下ネタ満載です。

しかもかなりぐだぐだしています。

それでもよければ見てやって下さい。

戦場にて主人公は敵を刺す

また僕は魔法世界を旅してまわった。

精靈さんたちが言つていたのはどうやら大戦を仕掛けようとしていた連合のことらしい。

なんで戦争なんてするかな・・・。

いろいろと見て周つたがやはり孤児が多い。

見つけては拾つて僕が作った国に送り込んでいるが一向に減らない。どうやら戦争が原因みたいだ。

なら原因を僕が潰してやろう。

そう考えた。

安直だが、動かぬ事には何もはじまらないからね。思い立てばばそく行動。

と言つことで今僕は戦上にいます。

まだ初めてはいない様なので好都合です。

どちらに着くか迷いますが・・・やはりこは戦争を仕掛けられたヘルス帝国でしょう。

「私の名はシンドウ・マオ・ヘルス帝国に助太刀いたす！」

と大きな声で叫んだ。

するとヘラス帝国の將軍つぽい人がなんか言つてきた。

「気持ちはありがたいが子供は戦場には来るな！」

まあ、もっともなご意見で。

しかし、僕も引くわけはないので。

「それはやつてみないとわからないでしょ！」

変な顔をして將軍。

「好きにするがいい！…だがどうなつても知らんぞ…」

とても優しいこと…。

「了解！」

やり取りが終わると戦争が始まった。

魔法の応酬から始まつた。

そのうちに僕はネギを両手に装備した。
そして連合軍めがけて走り出した。

近くまで行くと兵士が攻撃してきた。

こっちのネギを見た瞬間微妙な顔をしたがそれ以外は鬼気迫る雰囲
気を出していた。

だがそんなのは関係ない！！

僕がこの百年の間に研鑽した武術の一端を見るがいい。

僕は相手の後ろを取り岩をも碎くネギを突き刺した。

相手が戦闘不能になると新たな獲物に襲い掛かり的確にネギを急所に刺していった。

すると僕の周りに空間ができていった。

僕はそれを繰り返して一人の犠牲者も出すことなく敵を倒しきった。

負傷者はヘラス帝国は軽傷が大量にいた。

連合軍は傷は全くないが一ヶ月は動けない者が半数を占めていた。

ヘラス帝国軍は僕の活躍を見ていろんな意味で渋い顔をしながら話しかけてきた。

「先ほどはすまなかつた・・・。」

「いえいえ仕方ないですよ、こんな子供みたいななりをしているんですから。」

「・・・それはいいとして、なぜあのような攻撃を?」

「えつ、あれですか?」

「せうだなぜあのようなふざけた真似をしたんだ?」

「えーとですね・・・私はよく男性に襲われたりする事があつたんですよ。」

「それは・・・」

「いつもいつも殴つて済ませてたんですけど、部屋に侵入して來た

奴がいまして。」

「それで？」

「それにキレて怒った時にこのネギを出したんですよ。
そしたら（そんな物でなにができるんだ？）的なことを言ってきた
のでつい蹴り飛ばして刺したところ、ちょうどそこ刺せつたんで
すよ。」

「…………」

「そして私が手を放したらネギが砕けて汁を刺したところにまき散
らしたんですよ。」

「それは…………（きついなそれは）」

「それからですね……私が攻撃手段の一つにこのネギを使いだし
たのは。」

「（ある意味最強の武器だ）」

「だから別にふざけてるわけじゃないんです。」

「（いや、初見では馬鹿にじてるようにならしか見えない。）」

「これが私の中で唯一簡単な無力化の方法なんです。」

「そりか……（俺はこいつを敵にまわしたくないな唯一の無力化
がそんな攻撃だなんて……せつかく可愛いのに勿体無い）」

「「」さなんものなんですか？」・・・他になんかあります？」

「いや、こめな無ごが少しの間」「」

「別にかまいませよ。」

「たぶん王が礼として何かをくれただらうからな。」

「べつにいらないんだけどな・・・

まあ、国トップを見てみるのも一つの体験か。

戦場にて主人公は敵を刺す（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

あなたの好みへ。（複数形）

あなたの好みがピロティンへ。
ある、どうぞしゃうへ。

おやかの告白?

僕は連合軍やヘラス帝国に死人を出すことなく戦争を終わらす事に成功した。

しかし、僕は軍のある程度の地位にいる人には微妙な反応をされた。まあ、あんなふざけた事をくそ真面目にやりきつたんだからそんな反応をされても仕方ない。

とりあえずキャンプで負傷者に軽い治療をしたりして過ごしていた。

そんな事をしているとヘラス帝国の王が会いたいと言つていると、ヘラス帝国のあの将軍が伝えてきた。
断る理由もないのに会つてみる事にした。

将軍に連れられて入国。

帝国に入国すると様々なヒトから歓迎された。
なんでも全く死人が出ずに家族が帰つて来るからとの事。

だけど僕に会う時に戦場にいたヒト達だけは体のある部分を押されて話しかけてきた。

・・・敵にならない限りそんな事しないのに。

色々と入国に時間がかかって城にたどり着く事が出来たのは数時間経つてからだつた。

やつとたどり着いたらあの将軍の部下が王がこねじりのまでも案内してくれた。

なんかいつぱいこるんですけどヒトが。
右にズラコ、左にズラコ、前には王様とその家族が。
なにこの圧迫感。

そんなことを考えたりしてこると王様らしきヒトが喋り掛けってきた。

「お主の名は？」

「私の名は新堂 真央、マオ・シンドウです。」

「わかつた。お主が今回の戦争で我らを手助けしたことに感謝する。」

「なにか欲しいものでもあれば言つがいい。」

「それなら・・・テオドラ皇女殿下が欲しいです。」

「はつ？」

「わらわー？」

「貴様！舐めているのかーそんなことが叶えられるわけがないだろ
うー。」

「・・・ダメですか？」

「（おうふ、なんじや・・・）の感覚は？）黙つておれ！・・・お

ほん、なぜトオダリなんだ?」

「陸トー。」

「いいから黙つてねらぬかーよこひ皿ひまで口を開くなー。」

「わフ、わかりました。」

「それは・・・」

「それは?」

「(アクリッ)」

「可愛いからです。」

「はフ? (可愛い? 確かに私の娘は可愛いが・・・)」

「わらわは可愛いのか?」

「ええ、私のストライクです。」

「・・・おフ、お半は女ではないか。」

「(ルハジヤのフ・・・半はれしこんじやがな)」

「いえ、私は男ですか?」

「(はあ!?.あれで男!?.) そつそつなのか・・・だが娘が認めない限りやれん。」

「わらわはここに嫁——（むねがドキドキするのじや……）——」

ぞわぞわがやがや
周りが少しあわづく。

「しかし、娘をやつ簡単にやる事は出来ぬ。（娘が認めても娘は絶対に渡さんや——）」

「それは知っています。だから条件を出して貰え。」

「私が出すわけにはいかん……、やつじやトオドリよお前が出すがいい。（お願いだ超難しいのだして……）」

「わらわは……やじりや一戦争を早く終わらせねよつ手本つてくれぬかの？（これなら……）」

「わかりました。約束ですよ王様？」

「うむ、うむ。わかつておる。（くそ——）これは確実に嫁に行つてしまつ……、腰引かせようか？しかし、そんなことをすれば娘に嫌われてしまつ……、民にも迷惑が……どうすればいいんだ——）」

「話が終わつたら、わらわの部屋に来るのじや。」

「わかりました。それでは陛下失礼します。」

「うむ。（なぜじやー娘よ男なんて部屋に入れるなー）くしょ——」

#かのかの由々・（後書き）

読んでもらううれしい限りです。

おはようございます（おはよう）

今回も短いです。

テオドリック

わらわは困つておる。

なぜならば大勢の家臣とかの前で求婚されたからなのじや。いまでは恋文とかなら貰つたことはあるのじやが・・・

いつも父様に取り上げられて「娘を説かすのはゞいのゞいつじやーーー」とか言つてしまつたくそんな色恋話とかにはならなかつたのじや。

だが、今回はみんなの前で父様に真剣な顔をして（＊真央は普段通りです）わらわが欲しいと言つたのじや。

わらわにとつて初めてのことだつたのじや。

つこ「わらわはいいのじやーーー」なんて言つてしまつた。

しかし、あそこまで可憐にこの男なんてありえないのじや。わらわは初めて見たときに見とれてしまつたのじや。たぶん・・・一田惚れじやつたのじや。

だから父様に条件を出されたときに絶対に彼の物になれる方法を選んだのじや。

あとから考へるとわらわは彼を部屋に呼んだんじや・・・かなり恥ずかしいのじやーー

早へじぬかのう・・・

やつた！交渉は上手くいったよ。
いやーあそこまでトントン拍子に話が進むとは思ってもみなかつた
よ。

最初はヘラス帝国に恩でも売つといつかな?
孤兎を増やしたくないなあ・・・
そんな気持ちで行つたんだけど。

テオドラ見たら欲しくなつちゃつた。
なんだかつい胸をキュンッさせられたんだよね。

そういうえば昔、吸血鬼に追われた時もキュンッとしたなあ。
昔は全体的に弱かつたけど今はネギという最強の食材を片手に戦場
を無傷で走り回れるようになつたから怖いものなんてなくなつたん
だよね。

思わず口から「テオドラ陛下が欲しいです。」なんて出ちゃつ
たぐらいだからね。

ああー絶対無理だーと思つたんだけど。
意外とテオドラは受け入れてた。

そのかわり王様はすごい顔をしていたけどね。

しかも最後にはテオドラから絶対に僕が死なない限り僕の物になる
条件を出してきた。

これには驚いたよ。

だけど、王様の悲痛な顔が・・・。
やつぱり考えるのはやめておいたが。

そりこねば・・・僕はテオドリック部屋に来て、と聞かれたんだつ
た。

どうに行けばいいのかな?

うへん・・・ひとつあえず侍女さんで、でも聞いつかな?

おひ、ちよつとこじるひ。

「すみません。」

「はー? なんでしょうか? () の娘私のタイプだわ。」

「えーとですね。テオドリック様に部屋に来て、くれと言われたんですけど・・・どうかわからんじんですよ。」

「私が案内しましょうか? () ベッドまだないですね。」

「よろしくお願ひします。ゾクツ (なんか悪寒が・・・)」

部屋に回かねつゝ（後書き）

読んで下さりうれしこです。

騎士にならぬか？（前書き）

めつても短いです。

騎士にならぬか？

「こちらがテオドラ様の部屋です。（ホントにいわあ……これで男だつたらいいのに……）

「ありがと。（さつきからなんか背筋がぞくつとするんだよな……）

「こんこんつ

「なんじや？」

「お客様が来ました。」

「来たのかのー待つておひた早く入るのじやー。」

「それでは、私はここで失礼します。（テオドラ様があんなにはしゃいで……じゅるりつ）」

「いえいえ、助かりました。（なんか田が怖いなあ）」

「テオドラ様入ります。」

「うーん。もう二度とやらないわ。」

がちやり

「。やじの座るのじる」

「いいですか？（うわー 可愛らしい部屋だなあー）」

「屏速じやが……お主に頼みがあるのじや。」（聞かれてくるかの

?

「なんですか？」

「わらわの騎士になつて欲しいのじゃが・・・ダメか? (涙目で見上げるんじやつたかのう?)」

「いいですよ。（うあー）こんな頼みかたされたら断れないって……」

「ホントか！？（母様一成功したのじやーーー！ーーー）」

「それでなにしたらいいんですか?」

「わらわの傍にいれまい。やじの二つでも一緒に（やじ）」

「そうですか・・・わかりましたテオドーラ様。（早まつたかな？）

「むつ、わらわの事はテオと呼ぶの、じやー。」

「わかりましたテオ。」

「堅苦しき言葉つかふも二りぬのじや。やすかしきナビ・・・ハ
れしきのじや」

「わかつたよ、これでいいかいテオ。（樂でいいな）」

「お母のことをマオと呼んでもいいかの？」

「べつにかまわないよ。」

「ならマオ、お主の事を聞きたいんじやが？」

「うーん、あまり面白っこいとなんてないよ。」

「それでもここのはじや。」

「なら僕が魔法世界に来た時からでいいかな？」

「つむ、それでここのはじや。」

「あれは僕が…………」

そして時が経つていく。

騎士にならぬか？（後書き）

読んでくれてうれしこのです。

赤毛賀の邂逅（繪書丸）

。たたひせひひせ

赤き翼との邂逅

——ナギside

俺はナギ・スプリングフィールド。今はグレートブリッジに来ている。

「千の雷！ つとここれでここは終わつたな。」

「ナギ！ ついてこい。」

「どうしたんだ、詠春。」

「気配を隠して来いよ。…見てみる。」

完全に気配を隠して柱から見る。

俺は見とれてしまつた。そこでは青い髪をした蒼い瞳をした少女がネギを振り回していた。

なぜ旧世界の食材であるネギを持つて戦場で戦つているのかは知らないが、その戦い？はあまりに完成された舞の様だった。

しかも、そいつの周りには死者は一人もいない。

ただ体にネギが刺さり、時どきピクピクと動いているだけだった。

「す、すげえなああるいみ・・・。戦つてみたいぜ。」

「はあ！ ？ なんでネギなんかで戦つてるんだ！ ？ つていうかえぐつ！ ？」

隣で詠春が何か言つていたが関係ない。
師匠は呆れて俺を見てたが、すげえワクワクする。
そしたらアルが、

「敵にしたら厄介ですね。まあ間違いなく帝国の「幼女神降臨！-！」でしょ、」

と、いつていた。

それに師匠が、

「アルよ・・・彼の者には「真祖を超える神祖」とか言つマシなものがあるのになぜそちらを強調して言つの、」

と言つていた。

「うん？ どうやら、終わったようじゃな。」

視線を戻すと、そいつは立ち止まっていた。

美しい青い髪と蒼い瞳の似合づとつもなく可愛い少女だった。

「いい女じゃねえか。性格もよさそうだ・・・戦い方はえぐいがな・
・・。」

とかうカソがいつていた。すると一瞬、恐ろしげほどの悪寒を感じた。驚き見でみると

「出でましたらどうですか？ ここのみなさん。」

気配、隠してたよなあ。俺達。

俺は冷や汗を流していた。

「出できたらどうですか？…」のみなさん。」

「あなた達は紅き翼ですか？」

そう問い合わせるとアルが出てきた。

「ええ、私はアルビレオ・イマ、と申します。失礼ですがあなたは「幼女神降臨」と呼ばれるマオ・シンドウで間違いないですか？」

ああ、自己紹介が遅れてた。

あとアルそれは言つてはいけないとだよ？

「ああ、私の名前はマオ・シンドウで間違いないよあとテオの騎士もしている。（あとで刺す…）」

そういうとアルが警戒を強め後ろに引いた。アルは顔を青くして一部を押さえていた。。

「ということは、貴方はヘラス帝国についているのですか？（今…

・限りなく刺される光景が頭に浮かびましたよ…）」

「そうだよ、紅き翼のみなさん。で、退いてくれません？約一人なんか鬪志燃やしてみたいでください。」

まあナギとラカンですしね。

「マオだっけ？俺はナギ・スプリングフィールドだ。戦つてくれ！

…」

「…ナギ！」

「あはははー、いいですよ、勝てたら退いてくださいね。それと戦つてる間は赤き翼の皆さんは戦争に手を出さないで下さいね」

「後悔すんなよー、お前ら手を出すなよー」

ははは、根は普通なのに。。。

「それじゃ、遠慮なく行きますよ。」

さあ、どうくるかな？

来ても後ろを取つて刺すだけですけど。

「なにつー、ビニ行つた！？」

「ナギー！後ろだ！」

詠春が言つてくれたが遅い。

ナギに私が持つっていたネギが突き刺さつた。

「つおおおおおおおおーー？」

ナギは悶絶しながら転がつていぐ。

ゼクトとラカンは腹を抱えて笑つてゐる。

詠春、アルは顔を青くして同情の目でナギを見るが、肩が震えてる。我慢しなくてもいいのに。。。

「クハハハハ、笑わせてもらつたぜ？次は俺だ！」

ラカンが笑いながら躍り出した。

そして、ナギと同じように後ろを瞬時にとりネギを突き刺した。

「「ほーーー」んなもの・・・」はあつー」

ラカンはなんか氣色悪い声を出しながら逝つた。

この時紅き翼のアル・ゼクト・詠春は心を一つにして思つていた。
『ハイツドだー!』と。

「次は誰ですか?」

なんか詠春とか悟つちまつたような眼して。ゼクトは…少し押さえながら下がつていく。アルは引き攣つた笑みを浮かべていた。ナギはまだ悶絶している。ラカンは逝つちゃつてゐる。

そういひしている間に『グレード=ブリッジ』は連合に侵略されて
いた。

犠牲者は奇跡的に出なかつた。
重傷者は少し出たが・・・。

赤堀翼との邂逅（後書き）

読んでくれてうれしいです。

グレード=プロジェクトの後で（前書き）

今回も短い

グレード=ブリッジでの後で

『グレード=ブリッジ守護作戦』に参加して暫く。

それに参加した事により帝国からは『舞姫』『真祖を超える神祖』new!!『○○殺し』『幼女神降臨』、連合からは『なにあのネギは?』『俺はあのひとの攻撃で目覚めたんだ』『殺さぬ慈愛』『幼女神降臨』などの一つ名を付けられる事になってしまった・・・・・。帝国と連合で被つたのがあるけど・・・

しかも今有名な人物の二つ名特集っていう雑誌で魔法世界はもちらん旧世界まで広がっていた。
二つ名なんていらないのに・・・。

鬱だ、死にたい・・・もしくは引き籠りたい。

思考回路が危なくなってきた様な気がしないでもないが、それはまあ、置いておいて、何でこんなに二つ名がつくかな?

赤き翼みたいなカツコいいのならまだしも・・・

しかも、僕の場合はこれ全部がイコールで僕に繋がるし。

それと、二つぐらいはマゾとロリコンがいるよね。
だいたい僕は男なのになんでこんな二つ名ばかりつくかな?
一番いいのは『真祖を超える真祖』だけだよ。

それはこの際我慢しておこう。

うーんと最近思い出したけど、今は原作で言えばガトウ達が仲間になった後、ナギ達が『完全なる世界』について初めて知るところかな？

そこまで読み込んでないからよくわからないなあ。

いつも立ち読みだったから跳んでるし。

別に赤き翼 자체にはそこまで興味ないしねえ。

だいたい戦争の時は僕が出ることで両軍の死者はいまだにいない。ただ赤き翼によってたくさんの負傷者が出ている。

しかし、今回も死人は奇跡的にいない。

死人を出さないために僕は戦ってるんだしね。

死者を出さぬ戦争こそ連合にとってはきついだらうけどね。

給料は一応くれている。

前回の時はもらえなかつたけど。

貰つたお金はすべて孤児院に寄付している。

僕ができる最高の偽善だ。

そういうえばテオドラが今度連合の戦争を終わらさうとしている連中に会おうとしている。

誰なのかな？

そんな話あつたっけ？

あーあ、戦争早く終わらないかな？

まあ、終わらすために会いに行くんだけどね。
何事もなく終わればいいんだけど・・・

グレード=プロジェクトの後で（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

夜の迷宮にて（前書き）

アーウェルンクスが軽く壊れてる・・・

夜の迷宮にて

マオ side

よつやく僕こに行く時がきたみたい。

「テオドラが僕に着いて来て欲しいのじや、」と書つてきましたが。
まあ、テオドラの騎士みたいなもんなんだから着いてくるなと書つ
てもついていくナビ。

マオ end

テオドラ side

今日は連合のアリカ姫とかこう者に会つのじや。

もひるんマオは連れて行くのじや。

会つ場所は飛行艇での予定なのじやが・・・
どうやら場所を変えたこと言つてることわらわの国の中へ行つ
てきたみたいなのじや。

テオドラ end

テオドラから場所が変更されたと言われた。
場所は『夜の迷宮』^{ノクティス・ラビリンス}。

罠の匂いがブンブンする。

だけどテオドラは気にせずに行くんだろうなあ。
はあ

「なにをしておるのじゃ? 早く行へのじゃ。」

「なんか怪しくないか?」

「なにがじゃ?」

「急に場所を変えたことだよ。」

「つむ、マオちゃん、これば怖くなこのじや。」

「それでもだよ。（ハハー）うれしこな（）

「なんじや？ 怖いのかの？」

「違うよ、テオに危険があつたらどうするんだよ。」

「とりあえず私から離れないでね。（赤くなつて可愛いなあ・・・）

L

「いむか、わかつておぬのじや。（むふー娘こ向こがすぬのじや）」

「じゃ、行こうか? (うあー匂い嗅がれてるよー臭くないよね・・・)

（ ）

そんな話をしながら《夜の迷宮》に到着。

すると陰から女性が出てきた。

金髪の眼がきつこお姫さまっぽい人だった。
その人が出でくるなり喋り始めた。

「はじめましてテオドア陛下。私はアリカ・アナルキア・エン
テオフィシュアじゃ。」

「アーリーもなのじや。」

「じい、なぜ場所を変えると？」

「まっ、わらわはそちらが変更したいと聞いたのじやが・・・」

「む、私もそちらが変えたいと聞いたと聞いたのじやが？」

「じいやら騙されたみたいですね。」

「そのよ、じやな。」

「じいじいじいじい？」

「つまつこは包围されたるんだよ・・・敵に。」

ぱちぱちぱ

「わかつてゐるなら早いですね。」

「だれじや！」

「僕の名はアーヴィング・ランクス、出来れば抵抗しないで頂けると嬉しい。」

「くつ・・・何の真似じや！」

「君たちがいると今は厄介なんだ。特に「真祖を超える真祖」君はね。」

「私が？」

「そう君がいると死人一人でない。それでは困るんだ。」

「それのどじが悪いんじや！」

「戦争が続かなくなる。それに君にやられた仲間が新たな扉を開いてしまつたんだよ・・・はあつ」

「・・・・・・・」

「それにね、なぜか妹が君にお熱のよつなんだ・・・」

「・・・・・・・」

「しかも新たな扉を開いた奴が僕を熱く見つめてくるんだ・・・」

「・・・・・・・」

「それで・・・抵抗しないでくれないかい・・・じゃないと街を爆破するよ。（私怨で・・・）」

「なつ！？そんなこと許さんぞ！..！」

「なら大人しくしてるとこい、二日さえ抵抗せずに居れば爆破はない。」

「くつ・・・仕方ない・・・連れて行け。」

「テオ・・・行こうか・・・」

「うむ・・・。」

夜の迷宮にて（後書き）

ダメだ・・・」なんなんじゃダメなんだ。

文章の構成が下手でした。

次は上手く書きます。

その頃の赤れん（前書き）

ぐだぐだです。

それでもいいところの方は読んでください。

その頃の赤き翼

「マクギル元老院議員」

俺が証拠品を見付けてから数日後、俺達は再びマクギルさんの元を訪れた。

アリカ姫はヘラス帝国の第三皇女と接触を試み、俺、ジャック、ガトウ、詠春の四人は弾劾手続きの為にアリカ姫と初めて会つたあの広間の様な所にいる。

ついでに、他の『紅き翼』のメンバーはそれぞれ宿で待機だ。

「御苦労。証拠品はオリジナルかね？」

こつちに背を向けたまま、ガトウの呼び掛けに反応するマクギルのおつちやん。

まあ俺だってアリカ王女と一緒に敵本拠地を壊滅させたくてしたわけじゃないんだけど、はつきり言おうノリノリでやつてしまつたと。その後は俺が詠春に説教されたけどな。

ちゃんとメガロセンブリアのナンバー2の執政官が奴らの手先だと いう証拠を見つけてきたのにあんなに怒らなくともいいと思うんだが。

で、現在。俺、ジャック、ガトウ、詠春の面々で執政官の弾劾手続きをするためにマクギル元老院議員と法務官に会いに来ている。

「法務官はまだいらっしゃいませんか」

ガトウが聞く。

「法務官は・・・来られぬことになった」

「はつ・・・?」

「・・・あれから少し考えたのだが。ここにきて元老院が機能しなくなると国が終わる・・・そう思つてね」

「ハア」

「私の意見だけではない。そう考える者も多いことだ。時期が悪い。時を待つのだ。今回は手を引いてだな……」

おかしい・・・ここにマクギルのおつかさんじやねえ。

「待ちな。あんたマクギルのおつかさんじやねえな。何もんだ?」

ボン! 僕が相手の頭を燃やすと同時にラカンも気合パンチを打つていた。

「ちよつ! ? ナギおまつ・・・元老院議員の頭いきなり燃やして・・・ラカンお前もなに殴つてんだ! ?」

かなりテンパつてるガトウ。

まあ俺はわかるとしてラカンが殴るのは想定外だったのか?

「バーカ。よく見てみなおっさん」

「やうだぜガトウ。観察眼が全然足りてねーぞ」

「何つ……？」

炎の中から出てきたのはマクギル議員ではなく白髪の子供？

「……よくわかつたね。千の呪文の男、千の刃。こんな簡単に見破られるとは思わなかつ」ド・シユ。「」

「全く、まだ喋つてゐる途中なんだか。やはり君達は「真祖を超える真祖」の次に危険だね。悉く組織の手足を潰してくれて……おかげで対処に追われたよ」

チツ。当たる前に転移魔法で逃げてまた戻つてきたな。避けるのが無駄に上手いヤツだ。

「うわや、うわや、うわや……」

ラカンが一人突つ込むが、

「通しませんよ」

「へりえ」

と、白髪の野郎の仲間の登場で攻撃が阻まれる。

「強えやつひー。」

「ハッハ。だが生身の敵だ。政治家だとガチ勝負できない敵に比べりや、万倍！！ 戦いやついぜツー！」

意氣揚々と敵を潰しにかかるつとする俺達だったが、

「わしだ！ マクギル議員だ。スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーグ、詠春。奴らは帝国のスパイだつた！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている。軍に連絡をツ・・・は、早く救援を頼むツ・・！」

「げ」

「やられたな」

「君たちも少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「ハツ！ その前にテメエの人生の幕引きが先だろ」

俺とジャックとで飛び掛つたが、結局仕留めるとは出来ず、その後軍の介入により、首都、そして連合を追われることになった。

その頃の赤堀翼（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

脱出---(前書き)

ぐだぐだです。

脱出!!

Side アリカ

この場所に幽閉されてからどのくらい経つたのか・・・。
時間感覚がマヒしている。

まだ我が騎士は来てくれない・・・。
何を手間取つておるのか。

早く助けに来ないか！

私にはまだやるべき事は山ほどあるのだからこんなとひひでグズグズしてなど居られないのだぞ！

だいたい我が騎士はデリカシーが足りない。

私に馴れ馴れしいし、な。

いや、それは今は良い。

あのような態度の者は今までになかった。

私にはとても新鮮で心地よいものに感じた。

正直こうしてただただ我が騎士を待つのも嬉しいものに感じてくるから不思議なものだ。

そういう考えているうちに何やら外が騒がしい・・・。遠くの方で「敵襲ーー！」、「見張りは何をしていた！？」などの声が飛び交っているのがここまで聞こえてくる。

敵襲？ここに攻め入った者が居るといつことか？

ここまで考えて私は思い当たった。

我が騎士だ・・・。

ようやく来てくれた・・・。

まったく…遅いぞ？待ち草臥れてしまったではないか。

そんな思考に耽つていると私の目の前ではヘルス帝国の第三皇女とマオ（捕まつたときに聞いた）が扉に近づき耳を当てて声を良く聞き取つてゐる。

「むう…。余話などはよく聞こえんな。あちゅうあちゅうから爆発音のよつなものは聞こえておるのじやが…」

「そりだね…たぶんあの人達だらうと思つ。」

「…………」

「のうアリカよ。これはお前の言つておつた者達の仕業かの？」

「わからない。だがここに襲撃を仕掛ける者が他に居るとも思えない。おそらく我が騎士とその仲間達だ」

そう態々このよつなとこに襲撃をかけるなど、そのよつな物好きが多く居るわけがない。

高い確率で私達のうちどちらかの関係者だ。
そしてこれは我が騎士で間違いないと感じてゐる。
単なる私の願いかもしれないが…。

ひそひそ「の、マオ…」

ひそひそ「なに？テオ？」

ひそひそ「あのアリカの顔は恋する乙女のよつじやないかのう？」

ひそひそ「そうだね…たぶん今テオが言つてた人達の中にいる
んじやないかな思い人が…。」

ひそひそ「やつぱつマオもやつ思つかの？」

ひそひそ「でも、あの顔自分の気持ちにまだ気が付いてないみたいだ
けど。」

「やつ きからなにひそひそ話してくるへ。」

「ゴンハシ…カソシ…！」

「な？なんじや？何の音じや？」

「！」の音は…」

「ゴギヤンハシ！がらがら…」

壁の向こうから何やら鈍い音がする

。まるで壁自体を壊そうとしているかのような大きな音だ。
外側から数回叩きつけられた壁が崩れ去った。
そしてその開いた穴から出てきたのは…。

「よお来たぜー姫さんー。」

「遅いぞ、我が騎士」

出てきたナギに私は最初に言おうと決めていた言葉を口にするの
だった。

Side out アリカ

脱出---（後書き）

読んで「さつあつがとひついやれこめす。

薔薇？

「よお来たぜー姫さんー。」

「遅いぞ、我が騎士」

王女殿下はここ数日で感じた事を思つとシンボレだよね？
いや、クーデレかな？

助けられて嬉しいなら形振り構わずにナギの胸に飛び込めばいいの
にね？

恥ずかしいのかな？

シユツーパシツ！

「・・・王女殿下、なぜに私を殴るつとするの？」

「・・・わからんが、マオが何か不埒な事を考えていたように感じ
たので身体が勝手に動いたようだ」

・・・勘がいいね。

受け止めたからいいけどさ。

直撃したら重傷モノだよ？ 王族の魔力つてすごいね？ 受け止めた手が軽く痺れますよ？

ダメージは殆んどないけどね？

無防備でコレを受けたくはないな。

ナ「姫さん・・・なんでここにいつがここにいるんだ？」

ア「ここにとはマオの事か？」

マ「ああ、私とテオドアはアリカ様と一緒に捕まっていたのですよ。

」

ラ「おいおい、あんたがいるならなぜ逃げださなかつたんだ？」

テ「民を人質に取られたのじゃ・・・」

ラ「そりゃあ・・・大変だつたな。」

ヒ「それよりもナギ、早くここを出ましょ。」

ナ「そうだな、いくら敵がほとんどいなかつたとはいえ今仕掛けら

れると厄介だからな。」

そんなこんなで夜の迷宮を脱出。

そして赤き翼の秘密基地に。

テオ「なんじや！」はー？ ただの掘つ立て小屋ではないかー？」

マオ「テオ・・・彼らにも彼らなりの事情があるのですよ・・・（ほろつゝ）」

テオ「そうなのか・・・すまなかつたのじや・・・」

ナギ「ちよつ、ちよつと待て！なんか勘違いしてないか！？」

「いえいえ、いかがお助けてもらつたの……口を出してす
みません。」

テオ「悪かったのじゃ……」

ナギ「いや、だから、違ひつつある。」

アル「やうですよ。もともとこれは一番初めの隠れ家なので、一番
ぼろじのですよ。」

ナギ「アル……今お前がこじめかつたと心から思った……」

アル「ナギ……あなたにとつて私たちの熱い絆はそんなものだっ
たのですか……？」

ひそひそ「おマオ、あれはいわゆる薔薇といつものなのじゃもう
か？」

ひそひそ「アリカ様が可愛そつですね……（せみつ）」

ナギ「そこ聞こえてるやー……だいたい違うからなー！」

「俺は薔薇なんかじゃねえ！」

エイ「驚きだ……ナギがそんな言葉知ってるなんて……」

アル「まあ……それは置いておきましょうか。」

ナギ「おいつ！アル！お前が言い始めたんだろ？！」

アル「まあ、いいじゃないですか。」

アル「おまけは向を言つてこらのだ？」

ナギ「姫さん！？」

アリ「む？薔薇じやないとか叫んでいたくらいからだが？」

ナギ「違うからな！？俺は薔薇じやないからな！？」

アリ「とにかく……薔薇つて何のことなのだ？」

アル「それはですね・・・向う「この野郎一派つさじやねえー危
ないです・・・」

アリ「お主は何をしておるナギー?」

アル「まあまあ、ひとりあえずこれかいらじつあるかを話しましょ。」

アリ「むへ・ん! ひじやな。」

マオ「とつあえず、私たちせびつてしましちようか?」

アリ「ちよつとの間ナギ達と話をしてくれぬか?」

マオ「別にかまつませんよ。」

テオ「わらわもかまわないのじや。」

薔薇？（後書き）

ぐだぐだでした。

中途半端なところで切れちゃいました。

作者の腕が悪いせいです。

書いて楽しかったけど・・・

ついでに

ア・アリカ ナ・ナギ エ・詠春 テ・テオドラ ラ・ラカン マ・

真央

読んでくれてうれしいです。

増えた最強ヒーロー（前書き）

友達から言われました。

このまま原作通りに進むのか？と

少しの間だけあとはハッチャケます。

増えた最強と騎士の誓い

「さーて姫さん。

助けてやつたはいいけどこつからは大変だぜ。

連合にも帝国にも・・あんたの国にも味方はいねえ」

・・・さつそくナギが試しにかかったね。

この嫌になる程の現実にアリカ様はどう立ち向かっていくのかな?

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオステイアも似たような状況で・・。

最新の調査ではオステイアの上層部が最も『黒い』・・という可能性さえ上がっています。」

ガトウの話を聞いて思つたんだけど・・・こりやまたままずいんじやないかな。

一応アリカ様がオステイアのストップバーとなつていたはずだから捕まつた事で権力がもう意味を成さない。

黒幕の好き勝手が更に通り易くなつたつてわけだね。唯一の味方だつたマクギル議員は死んだらしいしね。不味いよねほんと。

「やはりそうか・・」

思つところがあつそうだが気持ちの切り替えは出来てゐるよつだ。

流石としか言いようがないな。

普通ならこうはいかないだらうか。

主に責任的な意味でだけ。

「我が騎士よ。」

「だあらその我が騎士つて何だよ姫さん。クラスでいつたら俺は魔法使いだぜ?」

ナギ・・・察してやりなよ。

おやりく姫様はお前が欲しくてたまらないんだよ。

むづ、いじけぬ僕がヒト肌脱いで恋のキュー・ピードでもこみつけかな?

・・・・・

よけこに話しがやせりこことになりそつだ。

「もつ連合の兵ではなこのじやう。
なうば主は最早私のものじや。」

「な・・・

あー、强行手段に出たねアリカ様。 そんなにまでしてナギが欲しかつたのかあ。

まさかのジャイア〇の法則をこいで、しかも生で見れるとは・・・。
感動・・・いや、感激ものだな。

せうじにて、アリ力様が、ナギの奴は文句あり、そうだがほんとに察してあげなよ。これじゃ報われないよアリ力様が。

「連合に帝国・・そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな。

じやが・・

主と主の『紅き翼』は無敵なのじやろ?』

言いたいことはわかるけどな、何故に主の『紅き翼』と言つ辺りでナギだけしか見てないの？

まあ、ナギラフだから仕方ないんだろうけど、ああ・・・なんか面倒事が起きそうな予感がする。

「世界全てが敵
良いではないか。

こちらの兵はたつたの7人。

「ちよつと待つのじゃーーー！」

あーあー、となるとこの流れはもしかして……。

「わらわのマオも世界最強じゃー！」

・・・・・

「たしかにそうだな・・・マオ殿よ我らの手伝いをしてくれるか?」

「この流れでは断れないでしょ。」

「いいですよ。戦争が早く終わるなら。」

「ありがと・・・」

正直お礼を言われるとは思わなかつたよ。

「さて・・・我等が世界を救おつ。
我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ」

「・・・」

騎士の誓いかあ・・・。

ある意味、告白だよね。

ナギが、俺は魔法使いだつてのことにか言つてゐるナギ・・・とにかくおめでとう。

僕は全力で祝福するよ!――

あ～あ、これでナギは人生の墓場を迎えたやつたよ。
もつ逃げられないよ!（姫様から）

ナギが獰猛な笑みを浮かべる。

おや、受ける気満々つてことか。

あつ、耳が真つ赤だ。

みんな気付いてないなあ。

言わないけど。

姫様が剣を抜いて掲げる。

やがて剣はナギの右肩の上で止まる。

「いいぜ。俺の杖と翼あんたに預けよう」

夕日が2人を照らして絵になるね・・・ほんと。皆が笑みを浮かべてその様子を見てる。

その中でテオはなんか羨ましそうに見てる・・・どうしたんだろう?

どうでもいいけど・・・剣・・・どこから出したんだろう?

増えた最強ヒーローの誓い（後書き）

読んでもらってうれしいのだ。

最終決戦直前（前書き）

ヤツチヤツタゼー。

最終決戦直前

あれから『完全なる世界』の拠点といつ拠点を潰して回る」と早半年…

いや、簡単に言つたけど、色々あつたんだよ。

それはもう、笑いあり、涙ありの感動話。

きっと、僕がいつの間にか紅き翼の一員として世間に知られだしてから今までをまとめるに、間違いなく単行本や小説、映画にできるくらいの内容だよ。

これを話すとなると途轍もなく長くなるので、すみませんが勘弁して下さい……。

ラカンが全部終わつたら自主製作映画作るぜーー！視点は俺だけどなーーみたいなことを言つてたけど。

・・・ラカン・・・それ、死亡フラグだよ・・・。

それはともかくとして、いよいよ全てに蹴りをつける為、僕達は最終決戦に挑むこととなつた。

そんなわけで、現在僕達は王都オステイアの最奥部（墓守り人の宮殿）にきている。

「不気味なくらいに静かだな・・・奴ら」

「舐めてかかってるんでしょう。だいたい悪の組織なんてそんなもんです。」

「いやいや、逃げる準備してんだる。こんなバグキャラ集団相手にいるほつが馬鹿らしーし。」

ナギが音沙汰の無い状態に僕が軽く否定する。
それに詠春が冗談とも本当の事ともわからないことを語り、ジャックがちげえねぇと笑い、ナギもそれもそうかと笑っている。
その場にいるアルはいつも通りに笑い、周りの兵士が不謹慎だぞと注意してくる、残念な事に髪をテオドラに可愛く切られてしまったゼクトは無言である。

でも・・・ゼクト・・・似合ひつな・・・少女服が。

ついこの前まで知らなかつたゼクトが女の子だつたなんて・・・。
ナギやラカン、詠春や僕も気が付かなかつた。
ましては幼女愛好家（YΕSロリータ・NOタツチ）と赤き翼では言われているアルでさえ気が付かなかつた。

それはさておき。
今は集中しよう。

「ナギ殿！」

帝国・連合アリアドネー混成部隊。

準備完了しました」

「おう！」

この場でのアリアドネー騎士団の総指揮官であるセラスが報告に来た。

それにナギが受け答える。

どうやら説得とともに共感を示してくれた連合や帝国の別働隊に中立であるアリアドネー騎士団も世界の危機を感じて僕たちと一緒に攻めてくれるようだ。

「あんたらが外の自動人形や召還魔を抑えてくれりや俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハツ。

それでお願いが・・・ナギ殿、マオ殿。」

「ん？」

「私になにか？」

あれ？ 私にとは珍しい。
一体何だろ？

「サ、サ、サインをお願いできないでしょうか。」

「まあ、いいか。それじゃ、私はいえーマオ殿には違つてお願いが

言葉を遮られた . . .

「…………それでなに？」

「あの……その……抱きしめられてください……」

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
888
889
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
988
989
989
990
991
992
993
994
995
995
996
997
998
999
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
1059
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1088
1089
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
1095
1096
1097
1098
1099
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128
1129
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1139
1140
1141
1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
1186
1187
1188
1188
1189
1189
1190
1191
1192
1193
1194
1195
1195
1196
1197
1198
1199
1199
1200
1201
1202
1203
1204
1205
1206
1207
1208
1209
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1219
1220
1221
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
1259
1260
1261
1262
1263
1264
1265
1266
1267
1268
1269
1269
1270
1271
1272
1273
1274
1275
1276
1277
1278
1279
1279
1280
1281
1282
1283
1284
1285
1286
1287
1288
1288
1289
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1295
1296
1297
1298
1299
1299
1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
1308
1309
1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1379
1380
1381
1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1388
1389
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1395
1396
1397
1398
1399
1399
1400
1401
1402
1403
1404
1405
1406
1407
1408
1409
1409
1410
1411
1412
1413
1414
1415
1416
1417
1418
1419
1419
1420
1421
1422
1423
1424
1425
1426
1427
1428
1429
1429
1430
1431
1432
1433
1434
1435
1436
1437
1438
1439
1439
1440
1441
1442
1443
1444
1445
1446
1447
1448
1449
1449
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457
1458
1459
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
1466
1467
1468
1469
1469
1470
1471
1472
1473
1474
1475
1476
1477
1478
1479
1479
1480
1481
1482
1483
1484
1485
1486
1487
1488
1488
1489
1489
1490
1491
1492
1493
1494
1495
1495
1496
1497
1498
1499
1499
1500
1501
1502
1503
1504
1505
1506
1507
1508
1509
1509
1510
1511
1512
1513
1514
1515
1516
1517
1518
1519
1519
1520
1521
1522
1523
1524
1525
1526
1527
1528
1529
1529
1530
1531
1532
1533
1534
1535
1536
1537
1538
1539
1539
1540
1541
1542
1543
1544
1545
1546
1547
1548
1549
1549
1550
1551
1552
1553
1554
1555
1556
1557
1558
1559
1559
1560
1561
1562
1563
1564
1565
1566
1567
1568
1569
1569
1570
1571
1572
1573
1574
1575
1576
1577
1578
1579
1579
1580
1581
1582
1583
1584
1585
1586
1587
1588
1588
1589
1589
1590
1591
1592
1593
1594
1595
1595
1596
1597
1598
1599
1599
1600
1601
1602
1603
1604
1605
1606
1607
1608
1609
1609
1610
1611
1612
1613
1614
1615
1616
1617
1618
1619
1619
1620
1621
1622
1623
1624
1625
1626
1627
1628
1629
1629
1630
1631
1632
1633
1634
1635
1636
1637
1638
1639
1639
1640
1641
1642
1643
1644
1645
1646
1647
1648
1649
1649
1650
1651
1652
1653
1654
1655
1656
1657
1658
1659
1659
1660
1661
1662
1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669
1669
1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
1679
1679
1680
1681
1682
1683
1684
1685
1686
1687
1688
1688
1689
1689
1690
1691
1692
1693
1694
1695
1695
1696
1697
1698
1699
1699
1700
1701
1702
1703
1704
1705
1706
1707
1708
1709
1709
1710
1711
1712
1713
1714
1715
1716
1717
1718
1719
1719
1720
1721
1722
1723
1724
1725
1726
1727
1728
1729
1729
1730
1731
1732
1733
1734
1735
1736
1737
1738
1739
1739
1740
1741
1742
1743
1744
1745
1746
1747
1748
1749
1749
1750
1751
1752
1753
1754
1755
1756
1757
1758
1759
1759
1760
1761
1762
1763
1764
1765
1766
1767
1768
1769
1769
1770
1771
1772
1773
1774
1775
1776
1777
1778
1779
1779
1780
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1788
1789
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1795
1796
1797
1798
1799
1799
1800
1801
1802
1803
1804
1805
1806
1807
1808
1809
1809
1810
1811
1812
1813
1814
1815
1816
1817
1818
1819
1819
1820
1821
1822
1823
1824
1825
1826
1827
1828
1829
1829
1830
1831
1832
1833
1834
1835
1836
1837
1838
1839
1839
1840
1841
1842
1843
1844
1845
1846
1847
1848
1849
1849
1850
1851
1852
1853
1854
1855
1856
1857
1858
1859
1859
1860
1861
1862
1863
1864
1865
1866
1867
1868
1869
1869
1870
1871
1872
1873
1874
1875
1876
1877
1878
1879
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1888
1889
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1895
1896
1897
1898
1899
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1909
1910
1911
1912
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1988
1989
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1995
1996
1997
1998
1999
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2029
2030
2031
2032
2033
2034
2035
2036
2037
2038
2039
2039
2040
2041
2042
2043
2044
2045
2046
2047
2048
2049
2049
2050
2051
20

「その・・・ダメでしょうか?」

「うん、まあいいよ」

「あいかわいいわ、おす！」

「おおー！ 抱きしめられた。

女の人は柔らかしなあ・・・

「おつがヒーリングもした……」それで思い残す「ヒヤホヤせん！」

そうセラスさんが言って、微妙な顔をしたナギがサインを書き、セラスさんに渡した。

「そういえば、私もナギもグレート＝ブリッジの一件以来ファンクラブが出来たと聞いた。」

んだかわからないらしい。

有名になるつてのは嬉しいもんだね。

なんか少し恥ずかしい気がするんだけどさ・・・。

余談だが、ジャックはもつと早くにできていたらしい。
まあ、あいつは赤き翼に入る前から有名だつたしなー。なんか羨ま
しい。
でもガタイのいいお兄さんたちが多いらしい。
なんでだろう?

最終決戦直前（後書き）

ゼクトのまやかの少女文化。

なんか・・・ゼクトを女の子にしたら可愛くないかな。

そんな感じでゼクトを少女化させちゃいました。

出番はあるのか？

それはまだわかりません。

なにほともあれ、読んでくれてありがとうございました。

ボス直前（前書き）

戦闘描写がぐだぐだです。

半分以上妄想の塊で出来ています。

正しいかもわからない。

主人公マジ空氣。

よろしければ見てやってください。

ボス直前

たつた今ガトウから連絡が入った。

連合・帝国の正規軍の説得は間に合わないらしい。

「既にタイムリミットだ」

「ええ。彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼らの手にあるのです

「ああ。よしつ、野郎ども。行くぞーー！」

「…………」「…………」「…………」

「一番槍は俺が行くー千の雷ーー！」

ドッガアーネン

悪魔たちが消滅。

帰つて行つただけだけど。

「次はワシジヤ。萌える天空ーー！」

ボオオオーネン

うん？今なんか聞き間違つたかな？

「私が行こう。真・雷光剣ーー！」

ピシャツーン

おおっ、縦に道が。

「次は私ですね。」

ズンッ！！！

黒い球が・・・敵を・・・ぐろいなあ。

すぐに消えるけど。

「よっしゃあ・・・やつてやるぜーー！カキンインパクトーー！」

ドゴーーーン

まさにただのパンチ。

次は僕の番だ。

何をしようか？

そうだあれにしよう。

「精霊よ・・・魔獣よ・・・ドラゴンよ・・・我が呼びかけに答え
てくれーー！」

おおっ、成功だ。

魔方陣が空にたくさん浮かびあがつた。
そこから友達たちが出てきた。

（（（（（（（久し振り）））））））

「久し振りだね。あそこまで道を開いてくれる？」

（（（（（（（お安い御用だ。たまには遊びに来てくれよ？みんな会
いたがつてゐ。））））））

みんながポカーンとしていつも見てる。
まつ、驚くよね。

「なんだこいつらー？お前が呼んだのか！？」

「これはずいー・・・・

「あれは上級精霊じゃないかの・・・・

「敵・・・ではないよな？」

「なんだ？強そうなやつばかりだな？戦いてえなあー。」

赤き翼の面々はあまり驚いてないようだ。

「みんなよろしく」

そう頼むとみんながいつせいに攻撃した。

効果は抜群だ。

敵が半分まで減った。

まあ、死人はいないからいいんだけどね。

「よしー！マオが道を開いてくれた！改めて行くぞ！—」

ボソツ 「・・・僕何もしてないよ。」

「お気をつけて。」

セラスさん・・・帰ってきますよ!
世界を救つてあげますよ。

みんなの為に！

そんなこんなで『墓守り人の宮殿』に突入。

『墓守り人の宮殿』潜入して罠を回避し、敵には僕のネギやアルの重力魔法やラカンのパンチやナギの魔法の矢や詠春の峰打ちで倒しながら進んだ。

「やつぱり計画の邪魔をするのは君達か『千の呪文の男』に『幼女神降臨』……」

「お前はあの時の！」

「私をその一つ名で呼ばないで・・・」

「僕の名はアーヴェルンクス、ここから先は通す事が出来ない。」

「なら、お前を倒して通つてやるぜ……」

「……無視？」

「やりせないよ……（僕の苦労を知らないくせに……）

アーヴェルンクスの後ろから五人でてきた。

詠春に剣を持った騎士のようなやつが。

ゼクトとアルに二人の魔法使いが。

ラカンには筋肉達磨が。

ナギにはアーヴェルンクスが。

僕には可愛らしいアーヴェルンクスを少女にした感じの女の子が

お互に敵が決まり戦いは始まった。

「あの……話しませんか？」

「……？ 戦わないの？」

「私達は足止めを言われただけです」

「なら、ナギが戦い終わったら終了だよ?」

「はい……でもお話をしてくれますよね?」

「何が聞きたい?」

「そうですね……好きな人はいます?」

「ううん、いないよ。」

「好きな食べ物は?」

「ネギ料理。」

「好きなことは人の笑顔を見る」と。」

「私をどう思います?」

「可愛い子。」

「そつそつで」「くつさすがだね千の呪文の男……」とか?

「どうやら終わつたみたいだね。」

「そうですね……」

「じゃあ行こうかな。」

「やひせなによ・・・」

「おひ

なんだここつ?

身体から黒いオーラが出てやがる。

「くつがかつてきやがれ! (だが、倒しゃあこことだー。)」

「行くよ・・・ (僕の恨みをくらへーー。)」

白髪から土の矢が全方位から飛んでくる。
だが・・・

「せつにのべらこどりつてのじなこばーーへりえ雷の斧! - - -」

「くへーーで負けるわけにはいかないんだーー (貞操の為に! - - -)

」

なんか急に攻撃が力強くなりやがった!

「しゃべりせよ! - - - へりえ雷の暴風! - - -

「当たらないよー君たち・・・いや『幼女神降臨』のせいで僕は・・・
・僕は・・・」

「マホがどつした! - - - へりえ! - - -

「がはつーくつをすがだね干の呪文の男・・・ (これで・・・僕の
貞操は・・・)」

「これで終わりだ！」

「くくく、君たちは僕らがボスだとでも思つて いるのかい？（死
なばもるともー。）」

「なんだとー？」

その時、俺たちを光が貫いた。

ボス直前（後書き）

感想を待っています。

読んで下さり恐悦至極。

最後の戦い（前書き）

ぐだぐだです。

やつぱり主人公マジン空氣。

最後の戦い

「・・・グハツ！！」

一条の閃光がアーウェルンクスごとナギの腹を撃ちぬいた・・・。
そのまま二人は糸の切れた人形のようになれる。

「「「ナギ！？」」「」

アーウェルンクスの蔑みと白刃にナギが疑問に思う暇も無い。
ナギが壁を抜けて後ろの宮殿側に床を碎いて落下、吐血した。
服は既にボロボロで体全体が血塗れ状態で痛々しい。
全員が驚きの表情を隠せないままナギを見た。

「「「「一？」」「」」

その場にいる全員がナギもやられてしまった事に驚愕する。

「誰だ！？」

突然に起きた惨状にラカンが周りを警戒する。

「！？」

そして王宮側にその姿を認識する！

ゴラツと陽炎の如く現れたそれは圧倒的な何かを放っていた。

「いかんッ！『最強防護！…』」

ゼクトがいち早く危機を察知し何重にも障壁を展開する。

気づけば大きな波動が紅き翼の全員を飲みこもうと迫っていた。

『氣合い防御！…』

ラカンも氣合いでの防御態勢でそれを防ごうと動き、アルもまた後方の位置だったのでそのまま障壁の展開、詠春はやられたナギを守るために刀を構えて氣での防御をしている。

僕は自分にできる最高の結界を皆に張った。

ないよりはましでしかないが・・・おそらく一撃だけは耐えることができる。

赤き翼と全員の防御を合わせれば少しの間だけ耐えるだろ？。

ドウッ！…！

ドウッ！…！

くつ・・・まだだ、まだ耐えれる。

ドウッ！…！

もう限界・・・

そして波動が数回着弾した後結界が壊れた。

僕を含め全員が血塗れの負傷になり波動で砕けた橋の表面で倒れ伏していた。

中でも詠春がかなり酷く負傷し、気絶している。。

「ぐつ・・馬鹿な・・」

両腕が無い状態でラカンが呻く。

「まさか・・アレは・・」

負傷の度合いはメンバーの中で軽いものの大ダメージなのは間違いない状態のアル。

そのアルも顔をあげ、紅き翼を追い詰めた者の姿を向きながら確認する。

それは黒の布が多いロープを来た顔の見えぬ存在。

風に棚引く黒い布がいつそうに怪しい雰囲気を出しており。

強大な魔力を放っている所から完全なる世界の首領である造物主であることがはつきりと読み取れた。

「かふつ・・へつ！」

その中でもナギは意識を絶つことなく起きていた。

赤き翼のメンバーの殆どが恐れる中でナギはその存在を血を吐きながらも不敵に見据えていた。

「ぐつ・・・

ラカンが動こうとする。

じつとしていれば死が待つてするのが解かりきつてゐるためだ。死亡フラグがこんなところで効力を發揮するなんて・・・。

「待て！」
「待て！」
「待て！」

しかし造物主はそのラカンや他のメンバーに一瞥もくれることなく、唯、後方へ目を向けた上でそのまま空間転移して消えてしまった。

「任せなジャック」

ナギが弱い足取りながらも立ち上がる。

息切れしながらも怪我をしている個所から無理をしているのは誰が見ても明らかだ。

だがその顔は不敵であり、眼光は全くと言つて良いほど衰えてはなかつた。

まるでまだ希望が残つてゐるかのようだ。

他の者が絶望している中でまだ、ナギの目は死んでいなかつた。

そして僕も諦めてはいない。

「い・・いけませんナギーその身体では」

同じく息切れしつつも立ち上がりナギを止めようとアル。

「アルお前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかしそんな無茶な治癒ではッ！」

「30分持てば充分だ」

「ですがッ！！」

アルが必死にナギを止めようとする。
それもそのはず。

明らかに致命傷のナギを治したとしても生命力が著しくダウンして
いる状態なためもう一度致命傷を受ければ死亡「確実である。

「ふふつ、よからう。ワシもこくぞ馬鹿弟子ー。」

こちらも息切れしつつ立ち上がり血を頭から流した状態で答える、ゼ
クト。

「ワシが一番傷も浅い」

「お師匠・・・」

「いや、一番浅いのは私です。」

事実、僕は流れる血ほど怪我はしていない。

「マオ・・・お前には魔力が殆んどないじゃないか・・・」

「大丈夫です。どうせやらなければ死ぬんです。」

互いに息切れしながらも僕とゼクトとナギは頷く。

「ゼクトー・マオ！たつた3人では無理です！」

アルがそれでも止める。

相手は一人とはいえど自分達よりも遥かに圧倒的な力を持つ者だ。
無理もない。

全員が全身ボロボロの状態。

もはや『絶体絶命』という言葉がピッタシだから。
特にナギは誰がどう見てもドクターストップ状態だからな。

これ以上何かやらかせば本当に死ぬかもしれない。

それでもね、アル。

男は好きな人を待たせておいてこんな事でくたばるわけにはいかないんだよ・・・。

「アル！ここで俺たちが儀式を止めなけりゃ姫さんが困るだろ？が

「……」

「ですが！死ぬかもしれないですよー」

どうやら気合いは充分。

ナギも不敵さが増してから大丈夫だろうかな。
なんだかんだ言いつつアルもナギの言うとおりに治癒魔法を掛けて
るからそれしかない、と解かつてるんだけど心配してるんだね。

「（）で奴を止められなければ世界が無に帰すのじゃ。
無理でも行くしかなかろう」

ゼクトも解かつてるようだ、流石はナギの師匠。
息を整えていつでも行けるようにスタンバイしている。
僕も準備はOKだ。
ナギも飛翔準備に移る。

「ナギ、マオ！ゼクト！待て！奴はマズイ！奴は別物だ。」

あれ？珍しい。

ジャックにいつもの余裕が無いなんて。

「死ぬぞッ！態勢を立て直してだな・・・」

「バーク、んなコトしてたら聞に合わねえよ。
らじくねえなジャック」

ナギの言つとおりほんと元らじくないな。
僕もカツコいとこ決めるかな・・・。

「俺は無敵の千の呪文の男だぜ？」

「俺達は勝つ！－任せとけ－－－」

「僕はすべてを守るため－手の届く範囲を救つため－諦めない！だ
から、安心して帰りを待つて」

ラカンが呆けた顔をして僕を見ていた。

だが、氣にしてはいられない。

「行くぞ！師匠！マオ！」

一気に王宮へと掛け抜く僕とナギとゼクト。

僕も後ろは振り向かずただ前の難敵のみに顔を向ける。

ここで終わらせないと皆の笑顔が守れない。

「マオツ！－ナギイツ！－

僕たちに声を飛ばすジャック、だけビジャックも解かってるんでしょ？

「いや、やうなきや何もかもおしまい。

「いつものようにめんべくさいだけじや済ませられない」と。

読んでもうこいつれしこのです。

決着・・・（前書き）

・・・「ひの覚えで書いた今回。

いのこのぐれやぐれやな『』がします。

それでも戻されれば戻して貰いたい。

決着・・・

「ナギ。ジャックにはああ言つたが、何か作戦でもある？ あれは確かに次元が違うよ

「作戦？ 別にねえ！」

「ええー、ちよつとお氣楽すぎるこじやない？

「ま、なんとかなるだろ？ それともマオは何か考えがあるのか？ 僕？」

「うーん・・・

「一つだけ手がある。これを使えば時間違いないく悶絶させれるよ

「マオ・・・、まさか『あれ』をやるのか？」

「何じや？ マオの考へてる事が分かるのかの？」

しかし、問題があるんじやうつ？ どこか躊躇つとるよ（じやしこ）ナギは何故顔を青くしてこいるのじや？）

「うん。確かに問題がある

「何が問題なんだ？」

「後ろを取らないと出来ないし、僕にはドアメをさせれない・・・

「けどあれは奴を確実に悶絶させられるだろ? (俺やラカンでさえ
悶絶したからな・・・師匠は忘れてるのか?)」

「多分・・・」

「だつたらやれよ、マオ。時間稼ぎくらい俺たち一人なら簡単だぜ
! な、師匠?」

「つむ、それくらいなら出来る。」

「分かった。じゃあ頼むよ?」

「任せろー。」

「俺が使えるすべてを注ぎ込んだ技を持つて悶絶させるから・・・
ラストはようしへ。」

少し進み、俺たちの前にはラスボス創造主ライフメイカーがたたずんでいる。そして奥にはクリスタルの中に捕われた少女がいた。

「姫子ちゃん!」

姫子ちゃん? を見てナギは飛び出しそうになつたけど、それをゼクトが止めた。

「ナギ! すぐに助け出したいのも分かる、じゃが最大の敵が残つてるのでじゃ!」

まずは奴を倒さないと姫子もこの世界も全て終わりじゃぞ!」

「師匠・・・分かった・・・それじゃあ、マオ、頼むぞ!」

「わかつた! ナギも何をやるのかは任せるけど・・・一瞬でいい氣を引き付けてくれ!」

僕がこれから使うのは僕のすべての技術を使った技。

「マオ、早く頼む・・・俺とゼクトがどれほど持ち堪えられるかは分からんからな」

「来るぞ! ナギ!」

「おう! 食らえ! 雷の斧!」

ナギが敵の攻撃を雷の斧で打消した。

その間に僕は極限まで気配を薄めて敵の死角に潜り込んだ。

「ナギ! 合わせるのじゃ! 萌える天空!」

「りょーかい! 千の雷! (萌える天空?)」

敵はナギとゼクトの攻撃を簡単にはじく。
そして魔法を放つ。
だけど、ナギ達もその攻撃をしのぐ。

「しぶといな人間」

「お生憎様、俺は元々しぶてえ～んだッ！！」

ナギが強がりを言つ。

敵は口に微かな笑みを見せた。

「だがいつまでそれが続く？」

「まだ！！

敵の警戒がそれた瞬間だった。

僕は全力で敵の後ろに回りネギを瞬時に出し、突き刺した。

「ぐああああああ！？」

敵は悶絶を確かにしていた。

だが、最後の力で僕は弾き飛ばされた。

そこで僕は意識を失った。

（僕・・・役に立つてない？）

ナギ side

マオが奴にネギを突き刺した。

最後にマオをふつとばし
あの腰が破壊されたかのような痛みに・・・
奴は悶絶していた。

「師匠ーーー！」

「「千の雷ーーー！」

師匠が俺に合わせて千の雷を打つてくれた。

これで終わりだ・・・。

「・・・クック、フフ・・・フフはは

そんなことを考えると奴は壊れたか様に笑い出す。

まだ死なねえのかよ！？

というか痛くねえのかよ！？

いや・・・よく見れば腰が引けてる・・・

「ははははははーー！ 私を倒すか人間！？ それもよいだろうッ

！ーーー！」

最後の力と言わんばかりに膨大な魔力で巨大な魔方陣がヤツの後方に浮かび上がる。

その複雑怪奇な曼荼羅模様に近い魔方陣がどんどん巨大化する。どつから、それだけの膨大な魔力を捻り出してるのか疑問に思うぜ！！

「我を倒し英雄となれ！！ 羊達の慰めともなるうーー！」

「しぶてえ奴だぜ！」

そして魔方陣から黒色の上の中以上の魔力を持つたレーザー？が一斉に俺に襲い掛かってくる。
しかも雷の斧を相殺する威力だ。

「我が2600年の絶望を知るがいいーー！」

「ケツー！」

下手に避けることも出来ないほど極太な魔法が俺に襲い掛かる。
俺は避けるのを諦め前方に障壁を展開させてダメージを最低限に抑えながらヤツに近付く。

ヤツが何か言つてるが、そんな事は関係ねえーー！

「グダグダ、つうるせえええツ――――」

「た語つてんじやねえよ――」

もう殆ど魔力も氣もねえ・・・それでも明日の分の魔力を引き出せ・

・・俺――

全身に纏う強化魔法の質量が一気に上昇していく。

持てる最後の魔力を籠めてヤツを殴る。

殴つた一撃はヤツの腹部を貫き宮殿を貫通、下の雲海の先で大爆発する。

「たとえ、明日、世界が滅ぶと知りひとつも――」

俺は・・・俺たち【紅き翼】は、そんなケチッこい事の為に戦つて
んじやねえ――

姫子ちゃんを助け――

序に世界も救つて、世界から戦争を無くす――

アリカのためにも――

たとえ俺の力が届かなくとも人間は、その程度で潰れる存在じゃねえ――

救えなくとも次世代が世界を救つてくれる――

そうやつて世界は救われていくんだよ――

光と雷の『魔法の射手』を一斉に発動させヤツを追い込む。
もう攻撃させる隙すら生まれない為に・・・。

「あきらめねえのが人間つてモンだろつがツ――」

ヤツを殴り蹴り飛ばす。

そして、長年一緒に戦ってきた俺の相棒である杖を雷を纏わせる。

「くつくく・・・世界を救うか？武の英雄には世界は救えん！！」

だから御託はいらねえ！！

貴様が言っていることは、唯の自分勝手の自己完結だらおがああーー！

雷を纏つて槍に形状を変化させた杖をヤツ目掛けて投げる。

「人・・・間を なめんじやねえええーツーーーーー！」

ヤツに槍が突き刺される。

コレによりヤツは消滅していく。

序だが宮殿も無事じやないけどおな・・・。

「ハア・・・ハア・・・」

最強の俺様でも疲れたぜ。

途中で師匠の援護がなかつたら遣られたの俺じやねええのか？
肩で呼吸するほどに息荒々しく呼吸する。

「大丈夫じやつたかナギ！？」

「ああ、なんとか……。」

「さうか……早く黄昏の姫御子を連れて脱出すること!」

「ああ!マオの奴も一緒にな!」

「そうして俺たちの戦いは終わった。」

決着・・・（後書き）

たぶんこれからは一日一回の投稿になります。

データが半分とんだせいで…！

書き直し中です。

これからもどうぞよろしくお願します。

古典と・・・(論議)

明らかに作者の力不足です。

それでも眠たれば眠っちゃうトモ。

「ん……？」

— すう すう —

元才？」

僕が目覚めたとき横にはアオガ僕の手を握りながら寝ていた。

「ああ、起きましたか？」

「アリ、みんなは世界はどうが、たゞ」

みんな無事で、それは世界は、生きましたよ

これは、アーティストとしての才能を發揮するための手段です。

なぜナメテを?

「まあまあ、それは置いておいて。ナギ達が待つてますよ。それに、テオドラ皇女殿下も起きたのを待つてたんですよ？」

「…………どれくらい寝てた？」

「せいぜい半日程度です。」

「やつか……「マオー起きたのか!」はい起きました。」

「マオ……心配したのじやーだから……暖いやーなんでも重ひじき聞いてもひりのじやー。」

「うそ……仕方ないなあ。」

「絶対なのじやー。」

「それで……こつまで元気にならなければここんでしょひー。」

バンッーー

「マオー起きたかーー。」

「じーか悪いとひせないかー!マオー。」

ナギとラカンが飛び込んできた。

「うそ。一応悪いことひせなこよ。元気こつぱこだよ。」

「やつかへよかつたぜ。マオのおかげで造物主の動きが鈍くなつて倒せたんだぜー!ありがとなー。」

そつか……役に立てたんだ。

「それはいいんだが……もひすぐ式典始まるの?」

「 もうでしたか・・・私は体調が悪いので失礼します。」

「 おーー・アルーー・あいつ逃げやがったな・・・。」

「 まあまあ、いいじゃねえか。」

「 おー、ラカンお前なんか変だぞ?」

「 ああんつ?俺のどじが変なんだ?」

「 いや・・・まあいい、とりあえず正典でねー。」

「 もうじやー・マオ正典には」れを着て出るのじやー。」

渡されたのは淡い青色のワンドース・。。
うーん、着てもいいけど・・・僕男なんだけど。

「 いいじやねえかー着るよマオー。」

ボソッ「ラカン・・・惚れたな?」

ボソッ「マオはやらぬのじやー。」

さて、とうあえず僕達は世界を救つた英雄になつた。

紅き翼とその一員となつたテオドラの騎士が共同で世界を救つた。

と、言つことで俺達は何やかんやあつて表彰されている訳で、

「・・・こんなに沢山の人の前を歩くの?。」

「我慢しろよそのぐらー。」

とうあえず僕はテオのリクエストの恰好をしていた。

何か偉そうなオジサンが・・・つてよく見たら元老院の一人だ。
アリカ姫とテオドラの前に来て、膝を着いて頭を下げて喋り始めた。

「云々かんぬん・・・!」

まあ元老院の一人が長々しく何か言つた後にメダル的な何かをもらえるらしい。

要約すると、すごいことしたから金メダル!みたいな。

ナギがビンタもらつたりして、僕の番になつた。
僕はテオドラからもううらしい。

まあ、所属が帝国のテオの騎士だからね。

「では、マオ・シンディウト。お主にこれを授けます。」

「光栄の至り。」

僕はそつこつて膝を着く……膝をむく……。

ダメだ！ 裾の短いワンピースのせいで膝が着けない。

ラカンが覗こうとしていたので後で刺すのは確定として、とつあえず薄い煙幕をした。

で、膝を着いて頭を下げるかけてもらおうとした。

「むう。マオよ。なぜ隠すのじや？」

「あ、ごめん。じゃないとスカートの中身が見られちゃうから……。」

「あつ……すまないのじや……。」

そのまま首に掛けでもらい煙幕が完全に無くなつた。

皆の方を振り返るとすこい大歓声が。

といつか奇声と言つか落胆の悲鳴といつかが聞こえてきた。

いつせいにカメラで撮られて、アルやらラカンも写真を取つてゐるし、何か俺やらかしたかな？

そのあとみんなで大宴会みたいなことをして無事を祝つた。
ラカンがやけに僕に近づいてきてテオに威嚇されていた。
どうしたんだろう？

そういうえばアリカ様が居ないなあ・・・。
どうだろ？

オステイアで・・・(前書き)

今回も翻じていただけます。

オステイアで・・・

アリカ様が居なかつたので探して見つけると。
悲しそうなだけど嬉しそうにしていた。

たぶん・・・ナギのことを考えてるんだろう。
何かアリカ姫がナギを思い出したりしていた時にガトウが現れた。
すごく疲れた顔してた。

大丈夫かな？

「時間です。まもなく崩落の第一段階が。」

何の話かさっぱりだ。アリカ姫も真剣な表情になつて

「進捗状況は？」

と聞いていた。

「アスナ姫封印直後から全艦隊全力であたつており、現在37%。

アスナちゃんを封印？

アスナちゃんはナギ達とともにいたけど？

「陛下のお考えどおり式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱もこれまでのところありませんが・・・崩落が始まればその限りでは・・・。全市民の救出は困難を極めるかと・・・！」

……崩落。

オステイア市民が死ぬかも知れない。

アスナちゃん封印。

これから考へ出される答えは・・・・・・・・・・・・オステイアが崩落？

何で？

そういうやあの魔法が正常に稼動したとすれば・・・なるほど。今日辺りに魔力消失現象が起こつて浮いてる大陸は落ちるかもしれない。

・・・・・正常に稼動したとすればだけど。

「…………ッ！－わかった。妾も直接指揮にあたる－！」

と、駆け出しけたのを。

「ちよつと待つて－！」

「マオか・・・・・今は急いでいる。喋つてる時間は無い。」

ガチで怒つてる顔。怖い。

「いやいや。何故急いでるのか知らないけど、とりあえず、状況を説明してください。もしかしたら助けるかもしれませんよ。」

「－－－－－は？」「

「あの魔法による影響で魔力消失現象が起こることによるオステイア崩落を防ぐために急いでいるんですね？だったら魔力消失現象

を緩和させられたらどうですか？」

「待て待て！そんな事出来るのか！？」

「え？出来ますよ・・・？」

「ちょっと待て！それは危険ではないのか？」

「いきなりアリカ姫に肩を掴まれ聞かれた。

「それに・・・魔力消失現象を緩和させられるとはどうこうじや！？」

「ちょ、落ち着いてください陛下！」

「・・・？」

「ア、アと荒く息をついていたアリカ姫は次第に落ち着いたのか話しあげた。

「先程、魔力消失現象を緩和できると言つたがどうやるのだ？」

なんだ？目が少し怖い。

「僕がオステイアの真下に行き僕の魔力と貯めてた魔力を消失した分だけ補給するんですよ。」

「なつ！？」

「それで、魔力消失現象は緩和しますけど・・・オステイアはゆつ

くつと落ちるでしょ。」

「そつか落ちるのは仕方がない・・・私たちが市民を誘導させる間だけでいい・・・頼めるか?」

「わかりました。魔力減衰現象の緩和くらいなら出せます。だけど急いで下さいね?」

「了解じゃ。ガトウ!聞いていた通りじゃ!できるだけ早く安全に救出するのじゃ!」

「わかりました!!」

そんなこんな僕はオステイアの下でお茶をしながら魔力を開放して連絡が来るまで待つた。

すぐに救出は終わったとは言われたけど心配だったので魔力を貯めていたうちの一つの魔力結晶(ネギの形)を地面に突き刺して少しづつ魔力を放出するようにしてアリカ様のとここまで戻った。アリカ様もガトウもへなへなして喜んで、そのあともまあ、なんやかんやで忙しく走り回った。

オステイアで・・・（後書き）

見てくてありがたい。

100%妄想で出来ているので間違いは多いと思います。

それでも良ければ見てください。

アリカ様とガトウと僕でオステイアの崩壊での人々の救出は上手く
いって死者はゼロだつた。

しかし、負傷者はそれなりにいた。

アリカ様は民を無傷で救えなかつたが、死ななくてよかつたと喜んでいた。

そして休む間もなくアリカ様は元老院に民の支援を訴えに行つた。

僕は家を作つたり、畑を作つたり、人を助けたりしていた。

オステイアの難民の五割を養えるほど働いた。

事実、僕の貯金の六割は復興のために使われた。

彼らの住む場所はオステイアよりかなり離れた場所ではあるが問題
はない。

ただ食料の問題があつたが、僕の長年の研究の成果（日常生活魔法）
を使えばかなり解決した。

だが、アリカ様が投獄されたという報告を受けてびっくりした。

なんでも、戦争のこととか完全なる世界のこととか濡れ衣を笑えるくらいに被せられたらしい。

みんなはメガロメセンブリアの老害共の仕業だとか言っていた。

2年後に処刑されるらしい。

アリカ様が奴隸公認法とかいう法律を決定したこともあって、民心はアリカ様を憎むほうに傾いているみたい。

まあ、あれは奴隸とは言つても過度の暴力とか危険な扱いは禁止されてるし最低限の人権もあるので、実質のところ借金の形になつてしまつたお手伝いさんと言うようなものなんだけど。

この奴隸公認法も各国にすさまじい数の難民の受け入れを認めさせるために必要なもので、さらに奴隸の扱いについて奴隸とは言えないほどの条件で正式に条約まで結ぶことに成功したアリカ様はなかなかやり手だとアルが言つていた。

まあ、実際奴隸になつた人からすればそんなもん知つたこっちゃないんだろう。

あつ、でも僕が作った村?といつか街に四割のオステイア難民は住んでるよ。

ただは申し訳ないとこ「う」とで二月に一度だけ税金を集めてくれるとか。

別にいいんだけど・・・。

アリカ様の投獄は世界中に渦巻くやり場の無い憎しみに対する生贋とかアルが言っていた。

どうせナギはアリカ様を救つて告白するんじゃないだろ?つか? その時まで僕は出来ることをしよ。

「おねえちゃん?どうしたの?」

「うん?なんでもないよ・・・僕男だからね?」

「うそ・・・もうこいや。」

「あきらめがかんじんだよ?」

そんな会話をオステイアの人たちとしながらこれから先どうじよつか考えてました。

とつあえず、一段落ついたから王様に報酬としてテオを貰いに行かなくけや。

次はどうかな？

ギャグが全く足りない・・・

Hロも全く足りない・・・

とこうじで、はっちゃけていきます。

マオの性格が黒くなるかも。

まあ、やれるだけやってみます。

救出といひだから（繪書も）

・・・クルトとタカラミ田の初めてじゃないかな？

いやつ！…忘れてたわけじゃないよ！？

ただ書いてなかつただけだから！？

まあ、どうぞ見てやつてください。

救出といれから

帝国に行つてテオを連れて行つてよいと許可をもらつた。しかし、時どき顔を出すことと泣きながら王様に言われた。別れが辛そうだからとしばらくの間は帝国を中心に活動をして連絡を待ちながら過ごしていた。

それから時がたち処刑当日の今日。

ガトウやアルから赤き翼の集まりを聞いて集合した。今日の為に『紅き翼』のナギを抜いたメンバーが勢揃いだ。まあ、勢揃いと言つてもアスナちゃん、テオ、タカミチ、クルトは少し離れた安全な場所で事の顛末を待つてゐるけど。

そしてナギを除いた僕たちは処刑場を囲んでいる兵士に紛れ込んでアリカ様が渓谷に飛び込むのを待つてゐる。

飛び込んだ後にアリカを助けてもこいつらは許さないかもしないから僕たちは保険でここにいる。

それで今、何が起きているかと言つと、何か偉そうなおつさんガアリカ様の罪状を読み上げてゐる。

ああ～・・・早く終わってくれないかな・・・この鎧とつても臭いんだけど・・・

しかもこの全身鎧つてかなり暑いんだよ・・・

あつ、アリカ様が処刑台の上に歩かされている・・・によいよかな?

一步一歩ゆづくつと魔物が「ひ」めく渓谷の上まで歩くアリカ様。
下からは魔物の奇声が聞こえる。

いくつこれからナギが助けるとしても、あまり気持ちのいい光景じ
やないな・・・

やがて谷底へと飛ぶアリカ様。
さつきの偉そうなおっさんが少し話すと、処刑場が終わつたような
空氣に包まれる。

「よーっし、こんなモンだ！」

あつ、ジャック。

「撮れたか？ ちゃんと撮れたか？ よおーし、御苦勞ー！」

「やれやれ・・・ラカンまだ少しタイミングが早いでしょうへ・・・

「だつてよー、アル、この鎧つて蒸し暑いし、ずっと突つ立つてた
だけで暇だつたんだよ」

「だからって計画より早く行動するなー、失敗したらどうするのー。」

「ああん？ そんときや、そんときだ詠春よお」

「お、お前達は・・・！ ジャック・ラカンー、アルビレオ・イマ・近衛・・・なんだつけ？」

「俺は詠春だ！！」

「まあまあ、落ち着いて。」

「マオ様！？」

「そんなことよつ、早く録画を止めるべやじや わいわい（様？）」

「フィリウス・ゼクトー？」

皆、思う所があるのか、それぞれ言葉を発しながら姿を現す。特に僕だけ様つて・・・まあ気にする必要はないか。

「そうですね」

「それなら俺が今やつといったから心配はいらん」

「・・・ガ、ガトウ！・・・馬鹿な！ 何故『紅き翼』がここにいるのだ？！ それでは、まさか谷底の女王は・・・」

「今頃ナギに助けられてんじゃないかな？」

「いかな『千の呪文の男』とはいえあの谷底から生きてませ……」

「普通はそういうナゾねえ」

そう、『普通』は、ね……。

けど、ナギって普通かな？

といふか、『紅き翼』で普通の人間が何人いる？
全員いろんな意味で普通じゃないと思う。

さて、谷底はどうなってるかな？

お~、結構深いな~・・・どれどれ・・・

ふむふむ、流石はナギってとこかな？

無事お姫様を救つたみたいだ。

あとはこの場をどう収めるかだが・・・

後ろでおっさんのが何がジャックと言い争いを始めてる。

ふう・・・やつぱり戦いになる訳ね・・・

戦力の差くらいちやんと見ようよ・・・。

ジャック辺りは大暴れできて嬉しいだろうけど、僕はどうかと言えば面倒なだけだよ？

さつさと終わらせて帰りたい・・・

数時間後。

メガロメセンブリア元老院の自慢の護衛は壊滅した。

まあ、僕を含んだ『紅き翼』のメンバーは手加減していたから死人はいないけど。

あと、ナギがアリカとのイチャイチャにかまけて俺たちを忘れてたから、ジャックなどは治まりどころが見つかず、少しやりすぎた。アルはナギ達を気付かれないように撮影してた。

今はそれも終わり、俺たちはアリカとともに秘密基地に戻っている。

「いやー、わりい、わりい。別にわざとお前等の事を忘れてた訳じ
やねえんだ」

その顔は全然反省してないな。別に期待していた訳じゃないけど。

「で、一人は結婚することになつたと・・・」

「まあな！」

- う む - / /

「はっ！ やっぱりいつなつたか！ 俺は最初からいつなると悟つてたぜー。」

「おめでとうござニサク、ナギ」

ジャックとアルが結婚の話を聞いてそれぞれの反応を返す。

「その後はどうするのじゃ？」

「そうだな」・・・アリカと前に約束してた京都にでも行くか

京都か。

京都はおろか、旧世界だって何年も行つていないな。ひょいひょい
かもしれない。

「そうか。だつたら僕たちも行こいつか。ジバ、テオ？　日本に行
く？」

「行くのじや！　旧世界の料理を味わつてみたいのじや！」

「私も家に帰らないといけないから一緒に行こいつ！」

詠春も一緒に。

「そう言えば、詠春。結婚するつて本当？」

「はい、これから帰つて式を挙げる予定です。」

終戦から一年の間、詠春は実家と『紅き翼』の時間を半々と分けて
いたらしい。

詠春はその間にどつやうお見合いをして新婚気分を味わつていたら
しい。

結婚はしてなかつたみたいなんだけど。

アリカ様の事があつたから、結婚はお預けみたいなものだつたらし
い。

「それはよかつたな。子はできそうか？」

「あはは、まだまだですよ。あと数年は夫婦だけで過りますもつです」

「わづか」

「取り敢えず京都に行くのは詠春、ナギたち、僕とテオとアスナちゃん? 他の皆はひづる?」

「マオも行くし、わしづまだ日本には行つた事がないからのう。」

ゼクトも行くんだ。

他の皆も頷いている。どうやら皆で京都へ行く事になつそうだな。

賑やかになりそうだ。

特にジャックが騒ぎそうだね。

花見の宴会でもあれば楽しそうだが、桜の季節に重なるか・・・

「どうやら全員行くみたいだな。詠春、青山の本家は俺たち全員を受け入れてくれると思つ?」

「多分大丈夫でしょう。敷地は広いですし、開いている部屋はたくさんありますし」

「なら安心だね! それじゃあ、ナギ。いつ出発する?」

僕が色々仕切っていたけど、最後は一応、リーダーのナギに任せること

のを忘れない。

こういう気遣いが団体行動を円滑に勧める為には欠かせないんだよ。

「たぶん俺たちがアリカを助けたのはなかつた事になるはずだが、しばらくは様子を見ようと思つてゐる。取り敢えず一ヶ月くらいか？ ほとぼりが冷めたらどうか田舎のゲートから旧世界へ行く」

「りょーかい」

一ヶ月か。久しぶりにのんびりできるねえ。

救出といひながら（後書き）

スランプ脱出？

これからアオをじひなつかせよつか迷つてます。

黒べすのほここかべ・・・口のみのがギャグなのか・・・

やに迷います。

作者の技量としては拙いものになるかもしませんが鼻で笑いながら見てഴつてください。

エヴァ 登場ーー！

一番大好きなキャラですね。

金髪幼女との出会い

旧世界に行くまでにみんな一ヶ月間のあいだに自分のしたいことをしていた。

ナギの場合は紛争地域の鎮圧と復興。

アルは月刊ロリロリの保存用・布教用・自分用を買いに本屋をはしごしているみたい。

ラカンは闘技場で金を稼ぎ、誰かのファンクラブでグッズを買いつているらしい。

詠春は愛しの恋人にお土産を買いまくつてるみたいだ。

ゼクトとアスナちゃんはテオにファッショングッズをするととか言われて服とかアクセサリーを買い集めている。
もちろんお金は僕が出したよ。

ガトウはアリカ様の無実を世界に教えようと情報を集めている。

タカミチ・クルトは新たな道に田覓めたり。

アリカ様はナギとの愛の巣で幸せそうに生活していたり。

僕は時どきナギの手伝いとかしながら旅をしていた。

旧世界に行くのも一週間をきつた時のこと。

僕はいつものみづブランブランと森の上を蛇行しながら飛んでこりと
きだつた。

僕は崖の近くをふらふら歩いている少女を見つけた。

あまりにもふらふらしていたので少しの間見ていた。

すると、少女が崖から足を滑らして落ちそうになつた。

急いで飛んで行って抱きしめて支えた。

完全に足が崖から離れていたから危なかつた・・・。

大丈夫か聞こうとしたら

「・・・お腹減った・・・」

と言つたので、その日は森で野宿する事にした。

僕が森で拾い集めたのや魔法球からのおすそ分けでとりあえずシチューを作った。

目覚める様子がなかつたので僕は少女の顔を見ていた。

どこかで見たことがあるようなないような・・・？

そうだ！昔追いかけてきた吸血鬼の女性に似てるんだ！

そう気づいた瞬間。ヒュツ

僕の後ろからナイフが飛んできた。

「だれ！？」

「ウケケケ！イマノラサケルトハヤルナア？ゴジュジンヲカエシテモラウゼ？」

後ろから現れたのは緑の髪を持った人形。

それだけなら可愛いんだけど、その手に持つた大きなナイフがそれを打ち消している。

「急に危ないじゃないか！」

「カルガルトサケタクセニヨクイウジヤネエカ」

「いやいや、かなりギリギリだったから・・・そういうえばこの主人つて誰？」

「ウケケ? ソコニイルジヤネエカ?」

「ん？ 」この子の事？

「アア。ソウダゼ。」

「」の子倒れたんだけど、なかなか起きないんだ。」

人形の少女？がそう言つと少女がむくりと起き上つた。

「茶々ゼロ遅いぞ？」

「『シノジン』アナイゼ。」

「ふん！ それでお前はいつたい何者くるわ？」

「ふふふ、とりあえずこれ食べようか？」

「／＼仕方ない・・・食つてやる。」

「『シユジンイイノカ？』

「どうあえず今だけはやめておく。（助けてくれたみたいだしな）

「まあまあ、どうあえず一人とも食べよ。」

そう言つて僕はシチューをついで一人に渡した。

「オレハクワナクテモイインダガ？」

「いいじゃないか？ みんなで食つた方が美味しいんだから。」

「・・・茶々ゼロお前もくえ。」

「アイアイアイサー」

「じゃあ、いただきます。」

「むつ？お前旧世界の者か？」

「そうだけど? 早く食べてみてよ毒とか入ってないから。」

そういうって僕はシチューを飲んだ。
——出来だ。

「ドジ・・・ゴショジン? ソンナマイノカ?」

やつた！

「なあ！ これほどの料理を食べたことがない！ お前は一体？」

「僕？僕はねマオつていうんだ。」

「マオ？・・・んつ？・・・お前は！－赤き翼の真央か！？」

「わうだよ。」

「・・・それは置いておいた、なぜ私を助けた？（最初に話すべきだつたが空氣に流されて聞けなかつた無理があるが聞いておかねばなるまい。）」

「・・・今頃あくどだ・・・」

「うるせーー答えるー。」

「・・・女の子が落すわだつたから。」

「・・・私はエヴァンジーリン・A・K・マクダウエル。悪の魔法使いで吸血鬼だぞ？（この私を女の子扱いした奴は500年ぶりだ・・・）」

「へえー」

「なんだその返しは！？もつといつなんかないのか！？」

「吸血鬼なんて怖くないよ？」

「なつ怖くないだと……？」

「エヴァンジエリンみたいな子なら恐くないよ。昔襲ってきた吸血鬼の女性は怖かつたけど。」

「……（あれ？昔襲つた吸血鬼……………私？）」

「お腹も膨れたみたいだし僕は寝るね？」

「ああ……（黙つておひつ）

ボソッ「オレクウキダナ……」

僕はエヴァンジエリンが目覚める前に茶々ゼロっていう人形といくつか話して出発した。
みんなもう集まっているかな？

出来はいまい。

もしかしたら書き直すかも。

ではまた次回。

えーしゅんの家到着（前書き）

まさか・・・なかなか進まない・・・。

スクナまでいじりとしたけど・・・書けなかつた。

まあ、どうかい。

えーしゅんの家到着

ゲートを何ともなく無事に通り抜け、僕たちはついに日本に着いた。

思わず『私は帰ってきた!』 したと思つてしまつたけど・・・。

今は京都で、少し山奥にある青山の本家に皆で向かつて歩いている。

「うーんっ! 京都の空気は美味しいなあ! テオもやう思つだろ?」

大きく背伸びしながら、僕は隣を歩いてくるテオにやう聞ぐ。

「やうかの? 都会のど真ん中よりは澄んでいるかもしだれぬが、わらわは普通に感じるぞ? まあ、古い独特的の空気を持つてているのは確かじやの」

うーむ・・・テオは僕ほど感動してないっぽい・・・やつぱり故郷の国だから感じ方が違うのか?

「マオ、マガマキヨウ?」

肩車しているアスナちゃんから質問が来る。

「うん・・・日本と言つ意味なら確かに故郷だけど、僕は元々、違うところから来たからな。正確には違うんだ」

「チガウンダ・・・」

むつ、なんか少し落ち込んだ？

「こじが俺の故郷じゃないから？」

「でも、こじは第一の故郷と言つてもいいかも」

「エイシコンノオウチ？」

「んー、違うかな？」

「そうですか？ いつでも来てくれてかまいませんよっ。」

「じゃあ今度お邪魔をしてもうりうよ。」

「わつと咲も喜びます、真央」

噂の詠春の恋人とも会つてみたいし。

きっと大和撫子を体現してるんだろうなあ。

「なあなあ、詠春。まだ着かねえのか？」

「もうすぐだ、ナギ。少し落ち着け！」

「なあなあ、詠春！」

「ええい、お前もか、ジャック！ 少しは真央を見習え！」

「え？ でも、俺は日本人じゃねえもん」

「まあ、よこではないか、ナギ、ジャック。詠春はもうすぐじやと言つとるし。あとりょくとすれば酒も飯も食えるんじや。それまでは我慢しよつ」

ゼクトに宥められ、ナギとジャックは渋々と引き下がるのを後ろから見ている。

魔法世界なら人目なんて気にせずに飛んで行けるナギ、こいつちじや気をつけないと駄目だから僕たちは歩いている。

どうやらナギとジャックはそれが気に入らないらしい。

ナギの方はゼクトと話した後にアリカに話しかけられ、イチャイチヤし始めた。

リア充め。

いいもん、僕にはテオがいるもん。

僕だつてリア充してやる！

自然を楽しみながらゆっくり歩くのも違つた楽しみがあつていいな
・
・
・

とにかく、田的田はもう田と鼻の先。

とりあえず、今日は歓迎会やらを用意していますと詠春が言つていつから今日と明日はたぶん潰れるだろつ。
暇があれば神鳴流の稽古でも見せてもらおうかな？

「詠春お願いがあるんだけど・・・」

「なんだ？真央？」

「神鳴流の稽古を見せて欲しいんだ。」

「ああ、それ位ならいいよ。というか、習ってみますか？」

「部外者が見るだけでも難しいんじゃ？」

「いえいえ、真央は私たちの仲間を戦争で殺さずに沈めた猛者として見られていて、なおかつ何故かあなたのファンが多いから大丈夫ですよ。」

「マオ？ケンヲナラウノ？」

「おや？アスナちゃんもやりたいのかい？なら技は教えられないけど基礎の剣術をしてみるかい？」

「…ウン。ヤツテミル。」

「いいの詠春？」

呪いの所為で未だに成長の兆しを見せないが、魔力はあるし、感卦法の素質もあるから剣術の基礎くらい教えるのはいいと思つんだけど…。

「ええ、この子は力を守る必要があるでしょ？だからとりあえず手段の幅を広げておいたほうが良いでしょ？」

「なんじゃ。アスナは剣を瘤つのかの？ なら、私もなにかするのじゃー教えてくれぬか詠春？」

「テオドラ様もですか・・・。そうですね・・・真央なにかないですか？」

「うーん、なら僕が教えようか?とりあえず柔術とか?」

「それでいいのじゃー。ジユウジユツだったかの?してみるのじゃー。」

「・・・うヒ、やう言つている内に着いたみたいだな」

「ハハ?」

道はこの先で終わりに来ていて、その向こうには青山の屋敷らしいのが見える。

「なんだか懐かしい気がするな・・・」

「マオ?..どうしたのじゃ?」

「なんだかこの建物の香りがこづ・・・懐かしいんだ。」

「マオの故郷も旧世界じゃったの・・・」

「うん、僕の家は木で出来ていたけどこんな匂いのする木じゃなかつたから。」

「真央? 入らないのですか?」

「あつ、ごめん。すぐ行く」

テオと話している間に他の人がすでに屋敷に入つたらしい。
最後に残つた詠春は正門の所で止まつてゐる僕たちに声をかけてきた。

「じゃ、行こうかテオ。」

「うむ」

えーしゅんの家到着（後書き）

次はスクナをおえて、一気に時間が飛びます。

お風呂の映像と云ふ。・・・おひ金髪幼女（前編）

—O H — O Z — O

金髪のキャラに玉緋をあげれない・・・。

こつわよつこわよつこわよつこわよつこわよつこ

では、さう。

お風呂と鬼神と死れ・・・あと金髪幼女

僕たちは詠春の家にお邪魔していた。

詠春はお風呂に入るといふてくれたのでお煎葉に甘えて入らせてもらひ。

アル・ラカン・ナギ・ガトウ・タカミチ・僕でお風呂に入っていた。

「やつぱり、日本のお風呂はいいねえ・・・」

「あれ？ 真央は日本世界の出身とは聞いていましたが・・・日本出身なのですか？」

「いやいや、違うけど・・・第一の故郷みたいなものだよ。」

「ああ、やつぱり」とですか。」

「マオ！ なんでお前にひつひつに入ってるんだ！ ！」

「へつ？」

「やつですよ！ 女性はあちらですよーーー。」

「別にいいじゃねえか！ ナギ！ タカミチ！ 」

「・・・もしかして女だと思つてゐる？ 」

「見たいですね・・・。」

「ラカン！ お前何言つてやがるんだ！ ！」

「ちよつとー待つた！！僕は男だ！！」

「「「へつ？？？」」

「ええ、 そうですよ？ 真央は正真証明の男性ですよ？」

「「「はあー？」」

「セツだよーなんなら見てみるー？」

ざばあ・・・

ぶしゅ――×2

「おい！？ なんで鼻血吹いてんだよ！？ ラカン・タカニチー！？」

「これはこれは・・・なかなか・・・」

「ちよつー？ そんな目で見るなーー！」

「おいおい、 そんな」としてる場合じやないだバツーー！」

「あつガトウ・・・いたんだ？」

「・・・まあ今はいい・・・とりあえずラカンとタカニチを湯船から出さう。」

「あれ？ タカミチヒラカンはどうしてフランクしてるんだ？」

「あつ詠春・・・実は風呂で鼻血を吹いたんだ。」

「・・・（ラカン・・・タカミチはわかるが・・・お前は知らなかつたのか・・・）」

「まあ、いいでしょ、宴会の準備が出来たので始めましょ、つか？」

「そうだね・・・。」

グオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツツツ！――――――！

「ねえ・・・詠春・・・」れなに？」

いやどうみても鬼神だけどね。
飯を食べてからにして欲しい。

詠春に聞いていたら。

詠春の部下？が走り込んできて「鬼神の封印がつ」つてきたから來たんだけど・・・。

正直言つてそこまで慌てる必要はないと思つ。

「あれは『リョウメンスクナノカミ』と書かれて千六百年前に封印された飛驒の大鬼神です。」

「それで? なんで復活しちゃったの?」

「恐らくは単に封印が限界を超えたんじゃないかと千六百年前ですし・・・もしくは此処にいるみんなの氣や魔力にあてられて活性化したのかもしません。」

そもそもそんだけ封印してたんだから封印した術者は優秀だったんだろうな。
僕たちの性か・・・。

「で、どうするの?」

「俺はやるぜ」

「私は必要なやうなので見学で」

「封印の準備するよ

上からナギ、アル、詠春です。

「ちよつと待つて。」

「なんだ?」

「僕にやらせて欲しいんだ。」

「…まあいいか。
だけど絶対倒せよ?」

「わかつてゐて」

- なにがおもてなす

۱۱۱۱۱۱۱

「わが二たよ（あした）」

94

おおー! めっちゃでかいなあ・・・。

強そうだけどなんかおかしいな?

ちぐはぐといふか・・・動きたいけど動けないみたいな・・・

叫びながら僕に向かつて手を伸ばしてきた。

でも・・・なんとなく危害を加えるよくな気かしながらそのまま掴まれてみた。

——真央！！！」

「大丈夫！！なんか様子がおかしから見てみる！」

そう言つてとりあえずみんな落ち着いてくれた。

鬼神の目が僕を見つめてきた。

おもむろには鬼神は儀を客は近づけた

だから僕は鬼神の額に腕を突っ込んだ。

鬼神は急二撃を放り投げた。

僕は腕を掴む何かと共に宙に投げ出された。

「マオ！大丈夫か！！」

ナギが僕を空中で拾ってくれた。

「うん……とらあえずは。

そう言いながら僕は腕の中を見た。

「僕はとりあえずこの娘を寝かせてくる。」

「おう！任してけ！えーと 契約に従い、我に従え、高殿の王。
来れ、巨人を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稻
妻『千の雷』」

いつも省略するのにここでは威力を出すためにちゃんと詠唱して

いた。

ドンツツツー・ズグワソツ・ゴロゴロゴロゴロシ！…！

無防備だった鬼神はたつた一発の全力の千の雷をくらい崩れ落ちた。

こうしてナギによつてスクナ？は簡単に再封印されましたわ。
なんだか忙しい観光旅行だね・・・

スクナ封印後少しつるんだあと僕達はそれぞれ別行動になった。
僕は旧世界で俗に言う「自宅警備員」つてやつをやつていて
時どき紛争地域とかをまわつてゐ。
そのおかげか魔法世界からの受けは良い。

＼ナギ sides／

皆と別れてだいぶ経つが俺は今非常に困つてゐる。

数ヶ月前から追つかけがいる。崖から落ちかけている少女を助けた
んだが・・・。

どこで聞いたのかマオの事をしつこく聞いてくる。
どんなに逃げてもついてくる質の悪さだ。

しかもその少女がかの有名な『闇の福音』『不死の魔法使い』のエ
ヴァンジエリン・A・K・マクダウェルらしくて厄介だ。

それに「マオ・シンドウはどこにいる！」って言われてもあれから
会つてないから教えたくても無理なんだが・・そもそも現状態でア

リカの独占力に引っ掛けりそつで生きた心地がしない。

うへんなんかいい案ないかな。

ふるふるふるふるふるふるふる

ん？携帯か？

「誰だ？」

着信：近衛近衛門・・・いつたいいつこんな奴の番号入れた？

まあ、出てみるか。

（お主がナギ殿か？詠春殿から聞いて居たのじゃが・・・麻帆良で働く気はないかの？なくても有用な人物を用立てはくれぬかの）

「？」

（実は昨日麻帆良は人材不足でのお・・・警備員が欲しいんじゃが・・・いなかつたら仕方ないんじゃが・・・）

うお！これはチャンスじゃないか！？適当に呪いでもかけて後は爺さんやマオに任せるとか。

そういうやタカミチもそろそろ麻帆良中学当たりに入学だったはず、ガトウの教育方針みたいだからな。

平和な日常も体験しひとけつてことか。

「おう丁度いいやつがいるぞ ただ連れていくのにちょっと時間かかるが・・・

(別に次の学期が始まるまでに着けばいいらしいからまだ余裕だぞ。)

「まあ最低でも一週間以内に連れてくよ

(ア解。)

ープープー

よじつ早速罷でも作りますか！

／ナギ side end／

／時間経過／

別に面倒だったからじゃなによー！

／ナギ side end／

罷は成功した。

いや・・・しそぎた。

悪くはないんだがな。

それで連れて来るのは、あのヒヴァンジエリンだと伝えた。
そのことを爺さんこと近衛近右衛門に言つたところ驚いてた。

「フォツ！？」つい

執務室に入るとソファーに座つて震えている金髪少女とそれを一矢ながら見ている爺さんがいた。

「爺さん顔が犯罪だぞ。」

「フオツ！？ いやいやわしの顔が犯罪となー？ ひどくね？」

「おい」

「ん？ ハヴァンジエリンか・・・ 無視してみよ。

「おい聞いているのかスプリングフィールドー。」

「爺さんどうだ？」

「ふむ・・・ ぐつじょぶじやー。」

「無視するなーー。」

ガクガク

襟首を手で掴み両足をオレの腹に当して身体全体を使って揺りしきれた。

「ひひ、 やめひー匂いがつくだろー。 (アリカに気付かれたら・・・ 俺は・・・) 」

襟を持つて猫とつまむつて身体から離す。

「なんだとー私が臭いとでもこいつのかー？」

ジタバタ

手足をばたつかせている姿を見ているのは楽しいがこれ以上異性の匂いが付くと・・・ガクガクブルブル

「フォツ フォツ フォ」

「おじお前らこれほどひつひつだ!」

「お主には麻帆良で働いてもらいたい。」

「なぜ私がそんなことをせねばならんのだ!」

「いのちいな・・・お前が三年間静かに暮らすこと」が出来ればマオに呪いを解呪してくれるよつて頼んでやるぞ?」

「くつ・・・本当だな?」

「フォフォフォといつひつで働いてもらひつひツヴァンジヨリン?」

お風呂と映神と戻れ・・・あと金髪幼女（後編）

ラカン・タカミチ・アスナ・アリカ・ガトウ

ここから出番が始んどない。

次はちゃんと出番をあげたいと思つ。

ラカン・アリカ・ガトウにはもう無こと思つたゞ・・・・。

みんなとの別れの詳細といふやうな警備員？（前書き）

前回の説明不足を補つため書きました。

どうぞ見てやつてください。

みんなとの別れの詳細と自宅警備員？

鬼神を封印した後の事。

僕らは宴会を楽しみ一皿を過ぎた。

それで、鬼神から出てきた少女についてなんだけど・・・。
あの少女はいわゆる核のような存在みたいだった。
降臨して使役され穢れた事により正気を失った鬼神の唯一の無垢なる部分。

それがあの少女だということが分かった。

あの子は田を覚ます気配がない。
どうやら鬼神を内から制御しようとしていて力を使い果たしたみたいだ。

起きるのはおそらく早くて一週間だろう。

まあ、それは置いておいて。

僕は今詠春に頼んだ稽古を見せてもらわることになった。

もちろんアスナちゃんやテオも一緒に。
なぜかゼクトとラカンもいるけど。

僕たちが神鳴流の道場に入るとどこからともなく人が一瞬で現れた。

「お疲れ様です皆さん。」

詠春がそこにいた人たちに挨拶をした。

「いえ、そちらの方は……もしかして……真央様ですか？」

「ええ、やつですよ。」

「初めまして。今日は稽古を見せてもらいたいに来ました。……いいですか？」

「トンでもありません！……いくらでも見ていいださる……。」

「やつやつですか……。」

「では、アスナちゃんはあつちで綺麗なお姉さんに教えてもらひやつ
かな？構いませんか？」

「あつ、はい……いいですよ。」

「それじゃ、アスナちゃんまたあとで。」

「うん……またアート……。」

「では真央とテオドーラ様にはやつで見てこて下れ。」

「なあ、えーしゅん俺はやつやいいんだ？。」

「お前もやつで大人しく見ていろ。」

そんな感じで僕たちは詠春の家でお世話をなつた。

そしてなぜかアスナちゃんとテオとゼクトと僕は「に」に残る「に」と「

なつた。

アスナちゃんはガトウが世話を見ると言つたんだが・・・。身辺の整理をするから一円ほど預かってくれのこと。

テオは僕と一緒にいることはおかしくない。

ただ・・・なぜかゼクトが残つた。

そして僕ら以外のみんなは世界に散つて行つた。

ナギはアリカ様と愛の巣を旧世界に作つて暮らすらしい。

アルは麻帆良に行って何かをするらしい。

ラカンは魔法世界で様々なことをするらしい。

たぶん映画製作とか?

ガトウとタカミチは仕事と修行をしながら世界を飛び回つていくこと。

詠春はすぐに結婚式を盛大にしてラブラブ空間を生み出し、次期関西呪術教会の長となつた。

そして僕は京都の詠春の家の近くの家を購入して自宅警備員をすることにした。

ゼクトとアスナとテオも僕が買った家で自宅警備員をしていく。

お金は結構稼いでたからね。

あれから一月

「おーい、おきるー。あさだぞー」

アスナちゃんとテオとゼクトの寝ている部屋の障子を開けながら声をかける。

部屋の中を見ると、アスナちゃんは昨夜布団に寝かせた時と同じ姿で寝ていた。

夜中に動いた様子はなく、彼女は幸せそうな顔で寝息を立てている。

それとは逆にテオはすじこアクロバティックな寝相をしていた。
どうやってあんな感じになつたんだろう?

それでもめつちや幸せそつな顔をしてくる。

ゼクトは起きてる時と違ひ完全に女の子と化していた。
これはアルには見せられないな・・・。

「こつも思つてたけど、子供の寝顔が無垢な天使のようなのってア
スナちゃんがテオやゼクトを見つめると納得できるよね・・・」
めいちゃん可愛いくらい。
思わず撫でたくなつちやうひ・・・・とこつか、すでになでてるんだけど。

おつと、ダメダメ。

早くアスナちゃんを起こしてこ飯を食べて送り出す準備をしなさい。

「アスナちゃん。起きる時間だよー。朝こ飯がもつできてるよ。」

「ふみゅ・・・・」

「わあ・・・・めつちやかわええ。

「起きた?」

「おまみ・・・・真央・・・・」

「ねへ、ねせよつ。ひかねの前に顔を洗って行け。」

「ん・・・」

眠そうな顔を擦りながら布団から出でてくるアスナちゃん。

「いっせん・・・なに?」

「今日はね、魚のフライとサラダと味噌汁だね。」

僕がそつまつと、アスナちゃんはい機嫌そうな顔をして顔を洗いに行つた。

「うひし、じやあ行くか」

「すぴー」

あれ、もしかして動きながら寝始めた?.

まあ、洗面所に着いて冷たい水で顔を洗つたら問題なく起きるだろう。

そして、ガトウがアスナちゃんを引き取りに来た。

「一ヵ月ぶりだね真央。」

「そうだね。」

「それで・・・アスナちゃんはどうだい？」

「うううううう。」

そこには泣いているアスナちゃんがいた。
たぶん今日でお別れなのを忘れていたんだろう。

「・・・なあ・・・真央。やつぱりこのままアスナちゃんを預か
てくれるかい？」

「別にかまわないよ。」

ガトウはアスナちゃんの様子を見るなりそう言った。

「わたし・・・ううにいいの？」

「うん。どれだけいてもいいよ。」

「というわけだ。すまないな真央アスナちゃんをよろしく頼む。」

アスナちゃんは素直に喜びガトウは苦笑いしていた。

その間横にいたタカミチは空氣だつた。

ガトウが出て行つてすぐにテオとゼクトと鬼神の少女・・・豊が起きてきた。

「のお・・・真央・・・朝、飯は・・・？」

「マオ・・・なぜワシリを起しことなかったんじや？」

「・・・・・・・・」

「朝、飯は魚のフライにサラダ・味噌汁だよ。起しことなかったのは氣持ちよせんづに寝てたから。」

「わらわは漬物を要求するー。」

「さうか・・・あつワシもいいかの？」

「・・・・・・・・」

「ふふふ、わかつたから先に座つて待つて。」

そんな感じで僕らは暮らしてます。

みんなとの別れの詳細と血元警備員？（後書き）

ガトウとゼクトとトオに若干の出番をあげられた。

しかし・・・タカミチ空氣（笑）
こんなはずじゃなかつたのに・・・

鬼神の少女の詳細は今度設定集を書きます。

それではまた。

設定 鬼神の少女について（前書き）

ぐだぐだ・・・

頭がうまくはたらかない・・・

すこしおかしなテンションで書いたので可笑しいかもしません。

それでも良ければ見てください。

設定 鬼神の少女について

ステータスというか説明

名前・リョウメンスクナ（分離前）豊（分離後マオ命名）

容姿・髪は長くて黒く、目は薄翠をしている。胸は大きくなくなつてしまい。背は力を使い果たしているため小さい。とても愛らしい顔立ちをしており見る人が見ればお持ち帰りしたくなる。真央との契約の指輪を敷いている。

性格・どんな生き物にも優しく厳しい。自分を穢れた身から引きずり出してくれた真央を好いている。

力・鬼の基本能力である怪力・神としての浄化の力・不死性・豊穰の祝福・解呪 etc

好きなもの・清らかなる乙女・美味しいもの・睡眠・平穏・真央

嫌いなもの・悪意・穢れ・ゲスなるもの・自分を使役した二ングン

むかしむかしに降臨し、禁忌の呪法で操られて人々を蹂躪しその血で穢れた優しき鬼神。

陰陽師から封印されている間、封印を破らぬように深き眠りについた。

しかし、強い魔力と靈力により活性化してしまい目覚めた。

鬼神は早く自分を封じられるように暴れる自分の身体を押さえつけていた。

そこにマオが現れて穢れた身から鬼神の核である部分を引き抜いた。

それにより鬼神の身体は弱体化し本当の鬼神は穢れから解放された。

弱体化したことによりナギの千の雷をくらつただけで沈んだ。

後日、鬼神の少女は真央が預かることとなり、豊と名づけられた。

目が覚めたとき真央と魂の契約をしたことにより真央が半分神になった。

そして今に至る。

設定 鬼神の少女について（後書き）

感想待つてます。

武術の理由・詠春の頼み（前書き）

真央の意識改革が急すぎて真央が黒化しそう・・・

まあ、いいか。

ではどういふか。

武術の理由・詠春の頼み

今日は僕がテオに武術的な何かを教えることになった。
前に約束していたから、したいところだったので教えることになつた。

どんなのがいいか聞くと

「自分の身を守れるのがいいのじゃ。」

とこつことなので柔よく剛を制すとこつことで攻撃よりも受け流すこと視点を置くことにした。
そしたら、ゼクトとアスナちゃんと豊もしたいと言つてきた。

ゼクトは

「ワシは魔法以外はあんまり良くないのじゃ。だから旧世界で武を鍛えるのもまた一興かと。」

と、いたつて普通だつた。

アスナちゃんは

「わたしはまもられるだけじゃいや……わたしもまもりたい。」

と、うれしい」とを言つてくれた。

豊は

「ちから……ない……だから……欲しい。」

と、失った力の代わりに欲しいらしい。

テオにはとりあえず合氣を、ゼクトには柔術を、アスナちゃんには剣術を、豊には中国拳法を教えて行く事にした。

ついでに全員に気配察知と存在感の制御、そして少しづつ全員が慣れてきたらそれのやつている武術を習得してもらつ。基礎を五年も積めば間違いなく一流にはなれる。

といふかする。

（時間は飛んで）

作者の技量が低いせいで鍛練中は飛ばします。

あれから数年。

僕たちは近衛詠春にあいに来ていた。

結婚して苗字が変わっていた。

ついでに話したいことがあるそつだ。

「お久しぶりですね真央、ゼクト、テオドラ様、アスナちゃん、・

・」

「おひさー。そしてこの子は豊かだよ。」

「久し振りじやの。」

「つむ、久し振りじや。」

「やつほー

「・・・・・」

「豊・・・あの鬼神の少女ですか？」

「わうだよ。少し大きくなつてわかななかつた？」

「ええ、あの時は真央よりも頭一つちにさかたですから。」

「・・・まあ背の事は置いてこひ。それで何があつたの？」

「じつは・・・娘が出来たんですよーもう五歳になるんですー。」

「・・・「えつ?」」「・・・「・・・?」

「最近まで近衛さんの体調が思わしくなかつたので伝えるのが遅く

なつました。」

「……やうなんだ、おめでとつ詠春。」

「おめでとうなのじや。」

「じじもか・・・ここのは。」

「詠春の子。」

「・・・」

「ありがとうみんな。」

「で、それだけじゃないんだら?」

「ええ、実は真央たちにお願いがあるんです。」

「なに?」

「私の娘・・・木乃香の遊び相手として護衛をして欲しいのです。」

「・・・遊び相手はいい、だけど護衛とはどうこうひとだ?」

「ぼそつ「真央・・・最近口調が荒くなつてないかの?」

「たしかにのう・・・それはそれでいいんじゃが・・・」

「だがそこがいい」

「アスナ・・・ど」でそんなことを覚えてきたのじゃ?」

「いんたーねつと」

「えつ・・・ええ、実は私が急に長になつたことと私の娘である木乃香がナギを超える魔力の持ち主なのですよ。だから、陰陽師の根暗共や西洋魔法使いのクソッタレビもが狙つているんです。」

「詠春・・・わかったそのお願い聞いてあげる。だけど・・・木乃香には絶対に陰陽術や魔法の存在を教えてその危険性も教えることが条件だ。」

「そつ・・・それは「平穏に暮らさせたいとかはダメだ。それ自体が未来を奪うことになるから」・・・わかりました・・・陰陽道はこちらで教えさせます。しかし魔法についてはお願いできますか?」

「いいよ、なんたつてこひちにまゼクトが居るんだから。」

「うむ、任せとおけ。」

「それじゃ、話もまとまりましたし木乃香に会つてください。」

「わかつた。」

「・・・の「へ」ワジも遊び相手にならなきやこかぬのかの「へ」。」

「ええ、お願こします。」

「・・・まあよいか。」

そのあと詠春に連れられて僕たちは木乃香と呼ばれる一人の幼女と
もう一人の幼女に出会った。

「木乃香・・・この子たちが言つていた遊び相手です。仲良くなれて
ださいね。」

「うなせじの「へ」のかつておつね。よつよつうな。ほり、せつ
やんむ」

「へへ・・・ひがせやへりわせせつなです。よつよつしき「へ」。」

「僕は新堂 真央ようじゅくね木乃香ちゃん刹那さくせん」

「ワシシはゼクトじゅ・・・みひじくたのむ。」

「わらわはテオダリジヤー・よひしきなのじや。」

「わたしあすなよろしく。」

「・・・・・・豊。」

「えーと、真央ちゃん・ゼクトちゃん・テオちゃん・アスナちゃん・ゆたかちゃんでええん?」

「あつてますよ木乃香。ほら、あつちで遊んできただいですか?」

「うんわかった!いこみんな!」

「あつ・まつてこのちやん!」

「やれやれ・・・」

自己紹介が終わり、木乃香ちゃんにちやん付けで呼ばれ僕は男ではないと思われていたみたいだった。

ゼクトは顔を赤く染めていた。

長いことちやん付けで呼ばれることはなかつたからだな。

まあ、何ともあれ長いことお世話になつそうだ。

武術の理由・詠春の頼み（後書き）

なんかぐだぐだ感がいなめない。

これはないだろ！

みたいなことがあれば感想をください。

読んでくれてうれしいです。

誘拐と最強の護衛（前書き）

時間があつたので投稿。

次はいつになる事やら。

ではまた。

木乃香と刹那と仲良くなつてから時がたつて事件は起きた。

木乃香が西洋魔術師にさらわれた。

しかも、西洋魔術師は陰陽師として活動していたらしい。それだけじゃなく、そいつは侍女を脅してなりすましていたみたいだつた。

そのせいで陰陽師の女性だと思い警戒していたから魔法で不意を突かれてさらわれてしまった。

僕たちは急いで木乃香を取り戻しに向かつた。

「こちのちやんを離せ……」

「駄目だ！この娘には我が野望の大切な一つなのだ！」

「どんな野望かは知らないが……返してもらひやー！」

「くかかかか！…それはさせぬ…怨鬼…腐鬼…」

陰陽師としての地位は高かくはなかつたと思つてはいたが……なかなかに強者だつたみたいだ。

憎惡の塊のような雰囲氣を纏つた鬼と強大な力を元々持つていた死んだ鬼を反魂させて使役しているみたいだ。

かなり強力な式神だ。

この鬼たちを召還してすぐに逃げ出した陰陽師。
逃がすわけにはいかない！

「のお真央？」今はワシとテオドーラとアスナに任せて行くとい。

「でも……」

「いってらっしゃい。」

「氣にせずぱぱっと終わらじてへるのじじやー。」

「……わかつたよ怪我しないでね。」

「まーくん……みんな……」

「行こうーせつちゃん！」

僕は刹那をともない陰陽師を追いかけ始めた。

やつと陰陽師に追いついた儀式をしていた。

木乃香のあまりある魔力を使い何かを呼び出しているみたいだつた。

「こちちゃんをはなせーーー！」

「せつちやんー！」

その光景を刹那が見た瞬間に飛び掛かつてしまつた。
でもその攻撃を陰陽師は気にすることもなく立つていた。
木之香の魔力風で刹那ははじかれたからだ。

「くつ・・・・」

ううおーーーーーーーーーん！
くうおーーーーーーーーーん！

どうやら呪還に成功してしまつたようだ・・・。

巨大な狼と黄金の毛をもつた九尾の狐。

「くかかかかかかーーー！成功じゃーーー！」

「こちちゃんに何をしたーーー！」

刹那が陰陽師に問いかける。

「仕方がない……」こいつはな……生贊だ。この賢狼と九尾の狐を使役するためのな……」

「そんなことをせぬか！」

僕は木乃香に向けて走り抜けた。

今までセーブしていた力を使って、たぶん誰にも見えなかつただろう。

よかつた……木乃香は寝ているだけのようだ。
だが……こんなことに木乃香を使ったことを許すわけにはいかない。

「ん!? 何故じゃ……どうしてそこそこくる……?」

「なぜかつて？ 普通にここに向かつて走り抜けただよ？」

「くそつ……やれ！ フェンリル！ 玉藻！」

「へん。

ぐおおお。

「なんじゃーお前らー？ ワシジじゃないーあいつらじグガアナゼダナゼダアアアアアアーー」

・・・陰陽師は呼び出されたフェンリル？と玉藻？に引き裂かれた。
あつけない最後だ……。

せつぢゃんは今の光景を見て氣絶してゐるし・・・。

まだ戦いは終わつたわけじゃない。

呼び出されたこいつらが残つてゐる。

そう思い力を体に溜めていると急に大きかつた巨体を縮めて子犬サ
イズになつたフェンリル？と玉藻？は僕の抱えている木乃香に近づ
いてきた。

敵意はなかつたのでそのままにしておいた。

するとフェンリル？（小）と玉藻？（小）は木乃香の指を甘く噛み
血を吸つていた。

あわてて追い払うとフェンリル？（小）と玉藻？（小）と木乃香と
の間にバスが出来ていた。

・・・どうしよう・・・使役しちゃつてゐよ。

とりあえず今回の事件はあつけなく終わつた。

木乃香は最強とも言えるかもしれないペツトを手に入れて。

あつ、ペツトというのは氣が付いた木乃香が詠春にペツトにしたい
と言つて詠春が頭を抱えながら許可したからだ。

フェンリル？（小）と玉藻？（小）はそれぞれ「フェル」「たま」
と名付けられた。

意外にもすぐにみんなフェルとたまにすぐ慣れて今では詠春の家の
アイドル的存在になつてゐる。

神のいたずら（前書き）

投稿できたら。

テスト～オワタ～

やつちまいました。

まあ、それは置いておいて今日はこれだけです。

次は明日中にいくつか投稿しようと思っています。

神のいたずら

朝起きると・・・何故か女になっていた。
いや・・・語弊がある・・・少女になっていた。

・・・何故？

そんなことを考へても仕方がないか・・・。

とりあえずみんなが起きる前にごはんの準備をしないと。
それに今日は大事な話が詠春からあるみたいだしね。

着替えなくちゃいけないんだけど・・・
いつもと勝手が違うからどうしようかな？
背が縮んでるしズボンも緩いしなあ・・・

そうだ！巫女服みたいな服を詠春からもらつてたんだつけ？
それを着とけばいいかな？
よし、そうしよう。

今日はどうじょうつかな？

そうだな・・・今日はパンと田玉焼きとベーコン・・・パン食にしよつ・

そうと決まれば田玉焼きを焼いて・・・横でベーコンをカリカリに炒めて。

野菜を水で洗つてから手で千切つて・・

焼いた田玉焼きとベーコンを皿に移して野菜を置いてテーブルへ。

あとは起こしに行くだけかな？

「おーい。みんな」はんだよ。

そつ声をかけるとアスナ・ゼクト・豊・テオの順で起きてきた。

「おはよ～真央。・・・・・?」

「おはよ・・・・?」

「…………？」

「おはようのじゃ……」
「おはよーのじゃ……？」

「ハーンとね。パンと皿用焼をドベーロンだよ。あと野菜。」

「わらわば」はんが良かつたのじゃ。」

「うひうひ、文句言わないの。」

「むーー」

「ねえ……真央……？」

「うふ~なにアスナ?」

「脅……縮んでない?」

「うむ……ワシも気になつてはいたのじゃが……脅ではなく巫女服に……」

「…………（ハクハク）」

「アリコヌマハビンヤのハ……何があつたんじやへ.

「ビリヒトも言わなかりやダメかなあ？」

「…………ダメ……（ジヤ……）（）（）（）（）

「まあ肝心のじやーなこがあつたのじやー？」

「ワシも知つたこし教えてくれぬかの？なぜこつもとは違つ巫女服
なのじやへ？」

「私も知つた。」

「…………（ハクハク）」

「はあ……わかったよ。蝶より見た方が速いから見てて。」

僕はやつぱりと巫女服みたいな服の上の部分をはだけさせた。

ふしゅつ！

心し
タ
！

ପାତ୍ରିକା

するとなぜかみんな鼻から赤い液体を垂らした。

「なつなつなにをしておるのじゃ真央！？」ぽたりぽたりつ

「アーニーのじさまだ早いとハシは懸つ。」だらだら

・・・・・ / / / / 「 ぽたつ

「真央……エロい……だが……イイ！」 ぽたぽたぽたつ

なぜかみんな顔を赤くしながら鼻を押されて口々に言ひ。

とりあえず鼻をチッショで拭いて布団に垂れたまるで○○○の後みたいになつてゐるのをシミになる前に洗おうか。

「シミになるから早く鼻拭いて、そして布団洗つかざりにかしないと。」

「ハハハ。ワシが魔法で取つておひや。」

ゼクトが鼻に詰め物をしてから魔法の言葉をつぶやいた。すると布団から血が染み出して空中で一つの球体となつた。便利だな魔法。

ゼクトはそれを乾燥させたゴリラ箱に捨てた。

そのあといひいろあり。

みんなが鼻に詰め物をして朝ご飯を食べたあとにまた話すことになつた。

神のいたずらひつまわるべく・・・(前書き)

寝不足です。

アニメ見てたりするの多いよ。

まあ、どうぞ。

神のいたずら? つまら続く・・・

ふう――。

お腹もほどほどに膨れたし話の続きをしようつかな。

さつきから四人の視線が凄いし。

でも、紅茶とか用意してからでもいいよね。

「飲み物何がいい?」

「わらわは牛乳がいいのじや。」

「ワシは梅こぶ茶を頼む。」

「私は真央と一緒にいい。」

「・・・緑茶。」

「りょーかい。アスナは僕と同じアールグレイでいいんだね。」

じょくほ

かちやかちや
じょくほ

「はいどーぞ。」

「わうじやな・・・次はちゃんと口での。」

「わうじやな・・・次はちゃんと口での。」

「早く早く。」

「・・・（口ク口ク）」

「わかつたよ・・・今日僕がね朝起きた時に身体に違和感を覚えたんだ。」

「違和感？」

「うん。それでね・・・寝巻を脱いで体を見るとね・・胸があつたんだ。」

「胸？」

「そひ。背もいぐらか縮んでて・・その・・ね・・・息子が・・・無くなつてたんだ。」

「息子？」

「――」

「？？？」

「・・・？」

「とつあえずかんけつ元氣つと女の方になつてた。」

「――？」

「それでね・・服を着たんだけどダボダボで着れなかつたんだ。だから詠春から貰つてた巫女服みたいな服を着てたんだ。」

「それは別にいいのじやが・・・戻れるのかの?」

「たぶん・・・」

「ワシは聞いたことがないのあ・・・そんな現象。」

「戻れなくとも私は構わない。」

「・・・(ノク)」

「まあ、今日は詠春が大事な話があるつて言つてたし・・その時に聞いてみようと思つてる。」

「そうだの・・・魔法でわからねば東洋の秘術に頼つてみる方がいいかもしけぬしな。」

「そうこういと。」

「それはいいのじやが・・・詠春はこちらに来るのか?」

「長が来るのは体面としてダメだから会いに行いつ。」

「まあ、それが妥当じやな。」

「すずーーー
ふう・・・・

それからお茶とかを飲み終えて僕らは詠春に行く支度をして出発した。

詠春の屋敷に到着。

そして詠春が現れた。

「真央！？なぜここに？私から向かうと言ったのに。」

「いやいや、一番偉い長が簡単に人の家に行くのはどうかと思つてね。」

「そうでしたか・・・お気遣いありがとうございます。」

「いや、それは別にいいんだけど・・・テオ達も連れてきちゃったんだけどいい？」

「構いませんよ。久し振りに木乃香達も会いたいと言つていましたしね。」

「そつか。・・・それで話つて？」

「実は・・・妻の父であるお父さんが木乃香を麻帆良に通わせたいと言つてきました。」

「それは・・・」

「ええ、腐つた正義の味方の中に放り込めと言つてきました。」

「・・・・・」

「その方が木乃香が安全だと・・・あちらはまじ厚意で言つてくれてるみたいなんで無下には出来ませんし。」

「それで?」

「木乃香には最強とまでは言いませんが強力な式がついてるのですがね・・・まあ、それは置いておいて、実は私たちのところで箱入り娘のように育てるのもどうかと妻と話し合いまして・・・ですが、だからと言つて未知の土地に木乃香だけ放り込むのもどうかと・・・」

「・・・つまり、僕たちにも木乃香について行つて欲しい」と?」

「申し訳ありませんが・・・そういうことです。」

「うーん・・・僕はいいんだけど・・みんながどういうかだね。そろそろアスナちゃんにも僕たち以外の人ともかかわって欲しいし・・・テオとゼクトにも一般人として過ごしてもらいたいし。」

「とりあえず聞いてみてからだね。」

「わかりました。よろしくお願ひします。」

「よじてよ、僕たちはともだちだろ？」

「そうですね。」

もちろんその後テオ達に麻帆良に行くかどうか聞くと、一つ返事で許可を得た。

「とにかく真央・・・」

「うん? なに?」

「なぜ背が縮んでいるんですか?」

「う~ん・・・神のいたずら?..」

「なんですかそれ?」

「いつかは治ると悪いといふんじゃない?」

「それは構いませんが・・・私が贈った巫女服似合つてますよ。」

「ありがとう。」

「ですが・・・ここにいる女性陣は構いませんが・・・神鳴流の女性陣にはその姿を見せては駄目です。」

「なんで?」

「今の神鳴流には数名ですが同性愛者の女性が居るんです。まあ、あの人たちは可愛いものに目がありませんから気を付けてください。今のあなたはとても愛らしい少女に見えますから。」

「そつ・・・そなんだ・・・。」

「ええ、無いとは思いますが・・・男性にも気を付けておいた方がいいかもしません。」

「うう・・・うん。わかった。」

その話のあと木乃香や刹那にあつたら木乃香には抱きつかれ、刹那には脱がされかけた。

そのシーンを見ていた神鳴流の人（女性）に着せ替え人形にされた。テオ達も一緒に巻き込んで。

麻帆良に行くのは早くても一月後。

神のいたずら？いつまで続く・・・（後書き）

次の投稿は夜になると想います。

麻帆良に到着（前書き）

ぐだぐだ・・・

だけど投稿。

読んでやつてください。

麻帆良に到着

詠春に頼まれてから一月があつとこいつ間に過ぎず。

僕たちは麻帆良に来た。

明らかにこの麻帆良は異常だ。

科学力が明らかにおかしいことが異常でないことが異常なのだ。

確実に時代を百年は追い抜いている。

まあ、それは置いておいて。

でかいなあ・・・世界樹・・・麻帆良の一番端っこからでも見える

よ。

「のう真央？」

「なに？」

「迎えはまだかのう？」

「じこちやんおわこなあ。」

「！」のちやん・・・

「・・・（すぴー）」

「すぐ来るよ・・たぶん。」

五分後

「いやー待たせて」めんなさい。」

「いきなり土下座で現れられても・・・」

「うう・・・これがジャパーズ土下座・・・」

「いやいや、何度も見たことがあるでしょうが・・・」

「ノリージャ。」

「あのー真央さん・・・ですよね?」

「うん、そうだよ。タカミチだよね?」

「はいーそうです。・・・とつあえず学園長のところに案内します。」

「よろしく。」

「他の臨は学校を案内するから・・・」うらりの先生が。」

「どうせよんじぐ。僕は瀬流彦と言こます。」

「こつからいたなんですか?」

「最初からです。」

「まあ、ここでじゅう瀧流彌先生。」

「まあ、やうですね。改めてよろしく。」

「…………」

「それじゃあ、みんな・・また後で。」

「喫茶店ですか？」

「できれば先生に・・・と言いたいところじゃが・・・それは無理だ
うつからうつ・・・喫茶店とかやってみぬか？」

「それで？」

「実はのう・・・麻帆良学園の生徒としてお主をとむ」とせチヨウ
ト無理があるんじや。」

「まあ、ここでしよう。それで話とむ？」

「学園長・・・僕に振らないでトセ。」

「こや・・・のう・・・高畠くふがのう・・・」

「・・・なぜそんな面前で呼ぶんですか？他にもあるでしょ？」

「ふおひふおひふお。お主がアノ幼女神降臨かのう？」

「セツジヤ。場所は二二じじいがねこいあるのでのへ。高畠へ。」

「はい。アスナちゃんや木乃香ちゃん達が通う学校の近くで立地もいいのがあります。」

「……二二じじいがねこいがねこい。土地の代金はこくらですか？」

「買に取るなじむともロチラが用意しておる。」

「二二じじいですか？ そのかわりこへをせよとかは受け付けませよへ。」

「かまわんのじや。」

「これで話は終わりですか？」

「こや、ちよつと待つて下れ。」

「なんですかタカミチ？」

「あなたにも夜の警備をして貰いたいんですけど……
「夜の警備ねえ……」

「かみいん給料は出すぞ。」

「こくらじじいがねこいか？」

「セツジヤの……一晩で五十万でじいがねこい。」

「……いいでしょ。その仕事も受けましょ。」

「交渉成立じゃの。それでのう、急に真央殿を警備に入れると反発があるやもしれぬから・・・今晚にでも警備している者達とあつて実力を見せて欲しいんじゃが・・・構わぬかのう?」

「りょーかいです。」

「それでは今晚よろしくお願ひします。」

「のう高畠くん・・・・真央殿はオトコではないのか?」

「わかりません・・・・僕も本当の性別は知らないんです。」

「・・・・あれはどひ見ても少女なのじゃがのう・・・・」

「世の中には不思議であふれてるんですよ。(あなたの頭みたいに・・・)」

「高畠くん・・・今変なことをするんでしょ?」

「いや、なんでもないですよ。」

「やうかの?」

「ええ、」

麻帆良に到着（後書き）

いまだに真央は性別が逆です。

感想とか待つてます。

一ヶ月もの間が空いてしまいました。

書き上げてはいたものの、データが全て飛ばとけてしまつたシグントがあり。

やる気がなくなりシンジマシタ。

だけど、頑張って書き上げました。

変なこととかあると思こめずカビ・・・
無視してぐだぐだ。

ワシの名はゼクトじや。

ナギ・スプリングファイールドの師匠にして赤き翼の一員じや。

ワシは赤き翼に入る気などなかつたんじやが・・ナギの魔力の大きさとその無駄の多さにイライラして教えておつたらいつの間にか赤き翼の一人になつておつた。

その後色々活躍してワシにも二つの名がついておつた。

「赤き翼のショタ」「ちびっこちびっこ」「あれお持ち帰りしていい?」

特にこれらは二つの名などではない!

思わずそう雑誌に言つてしまつた。

ワシ以外のメンバーは「千の呪文の男」とか「バグキャラ」とか「サムライマスター」とか「ロリコン」

とか最後の以外はましなものばかりなのに・・・。

連合軍側ではそう書かれていた。

ふと帝国側も見てみたのじや。

すると一人の少女が舞つてゐる写真の下に「幼女神降臨」「舞姫」

「真祖を超える神祖」とか書かれていた。

その舞つている姿を見て現実で逢えたらいいなと思つておつたのじや。

同性ながらも惹かれたんじや。

そしてワシは彼女に逢つた。

戦場で華やかに舞い、敵を殺さずに行動不能にしていく姿を見て思わず奥がキュンとしたのじや。

ただ・・・・・いつもお尻も違つ意味でキュンとなつたがの・・・。

その後も戦場で会つことが幾度があり、徐々にいつも・・・胸がぽかぽかすることが出来てきたのじや。

そしてアリカ王女とテオドラ皇女がさらわれたと聞きナギ達が助けに行き、そこで彼女とテオドラ皇女も基地に連れて帰つてきた。

彼女たちは国民を人質に取られ抵抗できなかつたそつだ。

そこで彼女をじつと氣づかれぬように見つめると彼女はかなりの天然の様だつた。

いろいろ飛ばしていつの間にか彼女もワシらの仲間になつとつた。

・・・これが赤き翼の変なところじやのう・・・。
いつの間にか敵じつた者も仲間になつていく・・・まあ、それが居心地がいいんじやが。

ワシらは眞実の敵を見つけ、倒し世界を救つたのじゃ。

話の展開が速すぎるとは思うのじゃが・・・ラカンが作ると云つて
いた映画を見れば詳細が誇張されてはいるがわかると思つ。

そんなこんなで、ワシらは世界を救い、英雄となつた。

その後の事なんじやが・・・ワシは真央から離れるのが心苦しくて
ともについて行く事にした。

じゃが、ワシは真央が男だとは知らなかつたんじや。

そのことで起きた騒動はまた今度話そう。

それで、何が言いたいかと言つと・・・ワシは・・・真央が好きだ
つたといふことじや。

長い時を過ごし、パートナーを作る事はないと思つて人の温かみを
かみしめる事は出来なかつた。

じゃが、ワシと同じ悠久の時を過ごせる真央と出会い、好きになれ
た。

ワシは今は幸せじや！

次の投稿はまた遅いと思います。

お久しぶりです。

豊の話ですよ!

まあ、心情なんですかごね。

豊はいろんなに話しません。

・・・まあ、どうや。

・・・ 我は・・・いや・・私は豊。

今私は幸福だ。

長きに渡る忌まわしき封印と穢れを・・・
私のすべてを清めてくれた・・・彼。

力はほとんど失つてしまつたけど・・・
私は私だけの人を手に入れた。

長き時を、悠久の時を残酷な鬼として過ぎし、何者からも愛されることのなかつた私。

だけど、そんな私を穢れから切り離し、家族として扱つてくれた。
彼にはそんなことは些細なこと過ぎて気にしてないと思うけど・・・

鬼としてしか存在することしか知らなかつた私に彼は・・・真央は
人としての姿をくれて、名前を授けてくれた。
「豊」それは私の本質の反面を表した名前。
それ自体は嬉しかつた。

だけど・・・彼は気付いているだろうか?
鬼に名を付けることの意味を・・・。

名を付けるといつことは姿を縛り付け、命を握るといつこと。

私は名に縛られた・・・けれど・・・真央ならば構わない。

これから時を・・・真央と・・・過ぐせるなら。

そのためならば・・・どんなものも恐れることは無い。

・・・真央・・・気付いているだろうか?
私はあなたに・・・どれだけ救われたかを。

体験することができなかつた人の温かさ・・・
出来ることのないと思っていた家族・・・
鬼と言う存在に出来る事のない友達と言つ存在・・・
もつとも愛しい存在・・・
味わうことのなかつた料理といつもの・・・
平和な日々・・・

たつた・・・それだけのこと。

私はあなたにどれだけの物を返せるだろう?

ああ、私は今・・・幸せだ。

出来れば・・・この幸せが永遠に続きますよ・・・。

変な話になつてゐるかも・・・

しかもかなり短いですし・・・

次は本編？ですよ。

投稿は今力メノ足の「」とく鈍足ですが出来るだけ早く投稿できるよう頑張ります！

それでは、また。

瀬流彦が・・・憐れ(泣)(前書き)

魔法使いの秘匿の心って基準低くないだらうか?

書いてて思った。

うーん、私だけかもしれないから何とも言えないナゾ。

今回も割とぐだぐだですけど・・・どうぞ。

瀬流彦が・・・憐れ（泣）

とつあえず交渉が終わり僕はみんなと会流した。

「あれ？みんな・・・その子は？」

会流した時には僕らの他に金髪幼女と縛られた瀬流彦先生が居た。
瀬流彦先生？

「あつ！真央！」

「むつ？マオ？」

「真央よ・・・」やがいきなりそこへいる瀬流彦を縛り上げたの
じや。」

「ちょつ・ちよつと・・・なんで僕が急に縛られなきやダメなんで
すか！」

「黙れ・・・変態が！こんな年端もいかない少女たちを後ろから一ヤ
二ヤとしながらついていく奴なんか縛られて当然だ！警察を呼ばれ
ないだけましだと思え！」

「ちよつと待つて！僕は一ヤ一ヤなんかしてないよ！」

「・・・どういう状況？」

「つーんとな・・・瀬流彦？先生が学校をだいたい案内を終えてな、
世界樹？の広場に行こうってことになつてな・・・ついて少し経つと

「んな感じになつてたんや。」

「つまつ・・わからないと。」

「セリやな。」

「の、・・真央」

「なに？あの金髪は真央の名を聞いて反応したんじゃが・・・知り合いかの？」

「・・・（ノクノク）」

「うーん？確かにどこかで見たような・・・」

「真央よ・・・とつあえず話をせぬとわかるものもわからぬぞ？」

「そうだね。」

ボソッ「うち・・・空氣や・・・」

ボソッ「セリちゃん・・・大丈夫や・・・」ちがつことる。

ボソッ「このちがん・・・」

なんかせつちゃんが木乃香と話してゐみたいだけどそれは置いておいて・・・

僕は金髪幼女に話しかけてみた。

「ねえ、君はなんで瀬流彦さんを縛り付けてるの？」

「聞くまでもないだらけ、」のロココノの毒牙に彼女らが落ちない
よつこだ（あんなに血が美味しそうなやつらを不味くするわけには
いかんからな）」

「ちよつ・・・僕はロココノなんかじゃないですよーちゃんと好き
な人が居ますー！」

「ほつ・・・それは誰か言つてみる・・・ウソは聞かんぞ。」

「ちよつ・・・なんて羞恥プレイ。」

「聞きたいなあ・・・ねえせつちゃん?」

「ややねえ」のちやん。」

「ワシも眞になるの!」

「わらわも興味シンシンじや。」

「・・・（ふるふる）」

「・・・勘弁してください・・・（涙）」

「まあいいだらけ・・・。」

「「「「「えー」」」」

「あつがどう・・・ホントあつがどう・・・（涙）」

「あつがどう・・・ホントあつがどう・・・（涙）」

なに？・・・」の状況・・・？

「いやーすこまかんでした。こりこり焦つて泣こむやこましたよ。
あーせせせせ。」

いたい地味にイタイよ・・・。

「いや、すまなかつた・・・。」

「こえ、構こませんよー。どうか・・・僕なごて・・・。」

(ねえ・・・これどうする？)

(どうせ出来ぬ。)

(時がくるのを待つかの？)

(どうでもここナビお腹空いた)

(あ、うひもや)

(うね(ぐわわー)ーーーー)

(空こた・・・)

(・・・) 飯にじょうか?)

「瀬流彦先生、とりあえずみんながお腹空いたみたいなんで良い食事処ないですか?」

「へつ? あつ? ありますよ。今からだと少し早いですが行けますか?」

「お願ひします。」

「なあ・・・私も一緒に行つてもいいか?」

「ん? 構わないよ。」

それじゃ行きますか。

それから瀬流彦先生が案内してくれたのは安めの料金で量も多くて美味しい・・・

牛丼屋でした。

何人かはぶーぶー言いながら食べてたけど味付けが良かつたと思う。

「さて、飯も食べ終わつたし聞きたいんだけど・・・君は誰?」

「? 私を知らないのか?」

「会つたばかりの金髪幼女を知つてたらそいつは逮捕ものだよ。」

「誰が幼女か――!」れでもお前らより年上だ――!」

「・・・教えちゃつていいいの？そんな事？」

「あつ・・・・・」

「別にこちら側だから問題はないんですけどね。」

「だいたい長生きならマオもモクテも豊もじきないかのう?」

— そ う だ け ど ・ ・ ・ 『

「そう言えれば……まーひやんにクーちゃんにーひやんの年は知らんない。」

「言つてなかつたつけ？」

「」「」「」「」

「いざなみ題もねえ」

私モ

「僕は今に近しくらしかな？」

- • • • 101 ?

そんなことは置いておいて……君の名前は？」

「あつ・・ああ、私の名は悪の魔法使いエヴァンジエリン・A・K・

「マクダウホールって！？お前等は不老不死なのか！？」

「いや違つなあ・・・不老ではあつても不死ではないなあ。」

「ワシもおとなじじや。」

「私は核さえ残つてればOK」

「まーちゃんたち・・・長生きなんやね。」

「うひうひのねやん？突つ込みビンビンと刺つが・・なんかちがわへん
？」

「美容の秘訣はなんなんやね？」

「あつそれは知りたいなあ・・・」

「いや！？そんなことほんとでもいい・・・お前らの姉はなんだ！教
えろーーー！」

「ワシの姉はファリウス・ゼクト」

「私は・・・豊」

「僕は新堂真央で豊はスクナ」

「・・・は？」

「それより瀬流彦先生、僕らで寝ねばいいのかな？」

「えつとこいのかい？」

「少ししたら起動するでしょう。」

「なら、ホテルにでも案内しようつか？」

「お願こします。」

「あつーちよつと待つてくれ真央さんーー」

「あれは・・高畠先生?」

「よかつた・・真央さんに喫茶店の場所に案内してなかつたです
から。」

「今から?」

「ええ、出来ればでいいんですけど。」

「・・・別にかまわないよ。」

「先に行つてもいいんですか?」

「ワシがいついて行つてもいいんじゃが・・・」

「わのだの・・・」

「・・・(口ク口ク)」

「つもかまわへんねんけどな・・・」

「わのりのやんがいいなら。」

「私は構わないよ。」

「じやあ行こうかみんな。」

「あはは・・・じゃあ、ついて来てください。」

「あつれ～？僕用無しじゃ・・・」

「はい～？あいつは？」

とりあえず喫茶店になる場所には着いた。
そこには築数年と言つたところの家があった。
元々が店だったのかそのまま使えそうだ。

「 いじが真央さんの店になる予定です。」

瀬流彦が・・・憐れ(泣)(後書き)

中途半端で切っちゃつた。

次は早めに書けるといいなあ。

原作とのズレを修正するのか、オリジナルストーリーに仕立て上げるのかで少し迷っています。

どちらがいいんでしょう?

出来れば感想で答えてくれると嬉しいです。

復活!! 作者のモチベーション + 異な時間 = 投稿できる

お久しぶりです。

数ヶ月たつてもお気に入り登録を解除してくれてない人には感謝感謝です。

最近、バイトに勉強忙しくてなかなか執筆（いつやつて書うとなんか力尽）出来なかつたのです…。

これからは週に一々一回投稿できると幸いです。

これからは文字稼ぎ + ちょっとした報告（友達の）

近況報告…

友達が出来ちゃつた婚をしました…

しかも相手は十六歳の女の子…（泣き）

興味ないつて言つたのは…嘘かあ————

私も…彼氏でも彼女でもいいから作る一ヶ月から…

と、まあ、どうでもいい話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2330u/>

ネギまに生まれし神祖の吸血鬼

2012年1月13日18時33分発行